
《Blade Online》

夜兎__✎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《Blade Online》

【Nコード】

N7059Z

【作者名】

夜兔 

【あらすじ】

VRMMO《Blade Online》のサービスが開始された。β版のテストプレイヤーの一人になり、このゲームにハマった俺は当然プレイを開始する。しかし《Blade Online》はクリアするまでログアウト不能のデスゲームだった。ゲーム1のハズレ武器を選んでしまった俺は他のプレイヤーから相手にされず、しかたなくソロで攻略を始めることにした。だがその途中、俺はバグによって高レベルのモンスターは闊歩するエリアに飛ばされてしまう。果たして俺はこの世界から出ることが出来るのだろうか。

0 (前書き)

注意です。作者はMMOについて疎いです。感覚で書いています。
こんな設定MMOじゃありえない、というのも出てきてしまうと思います。

巨大な樹木が並び太陽の光が殆ど入ってこない森の中で、俺は必死にモンスターの攻撃を避けていた。

全身が紅色の堅い殻に覆われた巨大なサソリ、シエルドスコピーオンが猛スピードで突進してくる。俺はこの数週間で鍛えられたスキル《見切り》を使用する。《見切り》は発動すると相手の攻撃が来ると思われる場所に赤い線が現れる。俺はシエルドスコピーオンの突進を完全に避けられる位置を確認すると、《ステップ》で大きく横に跳ぶ。

シエルドスコピーオンはそのまま突っ込んで行き木に激突した。しめた、チャンスだ。

「はあああ！」

俺はシエルドスコピーオンの殻の隙間に手にしていた太刀の刃を滑り込ませる。ジューブ、と嫌な手応えが伝わってくると同時にシエルドスコピーオンの上に表示されているHPバーが少しずつ減少していく。最初からレッドゾーンだったHPバーが最後まで削られ、消滅する。

シエルドスコピーオンはキシヤアア、と断末魔の悲鳴を上げながら光の粒となつて消滅していった。これがこの世界での死だ。こいつに限らず、俺もHPバーが無くなれば同じように死を迎える。そして生き返ることは二度とない。

レベルアップ音が二連続で響く。シエルドスコピーオンを倒したことで経験値が入り、でレベルが上がったのだ。本来シエルドスコピーオンは俺のようなレベルの低いプレイヤーが倒せるモンスターではない。だから一気にレベルが二つも上がった。

なんでそんなレベルの高いモンスターを俺が倒せたかというと、

朝から今までずっと今のシエルドスコピオンと戦い続けていたからだ。因みに、現在時刻は夕方六時半。

あいつの攻撃を避けてわざと樹にぶつけさせて怯んだところを、殻の隙間から刃を差し込んでダメージを与える。これをずっと繰り返し続けた。それで今、やっと倒すことが出来たのだ。

正直、もう立っているのが辛いぐらい疲れている。モンスターを倒すと自動的にアイテムはバッグの中に収納されるようになっていく。もうここに用はない。洞窟に帰ろう。

俺が、いや俺達がこの世界に来てから数ヶ月。

VRMMO《Blade Online》のサービスが開始された日から、地獄は始まった。

0（後書き）

どうも夜兎と申します。VRMMOモノを書くのは初めてなので矛盾などが出てしまうかも知れませんが、一生懸命書かせて貰います。誤字脱字、感想など貰えると嬉しいです。

二十年前、軍が訓練のために開発したバーチャルリアリティ技術は今や世界中で使われている。体感型^{ドリーム}仮想空間装置の仮想空間を利用した介護やスポーツなどが進歩していく中、ゲーム技術が取り残されていった。

ビジュアルやデータなどの問題により、《ドリーム》から出ているゲームはどれもほのぼのとした生活系のゲームばかり。激しいゲームを好むプレイヤー達から、不満の声が上がる。そんな中、あるゲーム会社がVRMMO《Blade Online》の開発が成功したことを発表する。プレイヤー達は歓喜し、その発売を今か今かと待ちわびた。

発表から二年後、ゲーム会社から《Blade Online》のβ版が応募したプレイヤーに数量限定で配られた。俺、矢代^{やしろう}暁^{あかつき}もβ版に応募し、抽選に選ばれた。

自分がゲームの中に入りモンスターと戦うというのは、やはり最高に楽しい。俺はβ版終了まで毎日何時間もプレイし、攻略していた。

それから二ヶ月、ついに《Blade Online》が発売された。

『もうすぐだな』

β版で知り合ったガロンというプレイヤーから送られてきたチャットを見て緊張感がより高まる。

《Blade Of Online》のサービスが今日の午後十

二時から開始されるのだ。俺は出遅れないために《ドリーム》を頭にセットしている。十二時になった瞬間に電源を入れて出遅れないようにしないとな。

β版をやっている分、他のプレイヤーよりも有利とはいえ、おちおちしていればすぐに抜かされてしまう。ゲーム内でガロンとその仲間に合流し、すぐに攻略を開始するつもりだ。

「これで現実から目をそらせる」

俺は《Blade Online》のパッケージを眺めながら、そう呟いた。

俺には親が居ない。小さい頃に二人とも交通事故で死んでしまった。まだ小さかった俺と妹の^{しおり}栞は祖母の家に引き取られる事になった。俺はあの時に誓ったんだ。栞だけは何があっても守ると。「^{あかつき}暁お兄ちゃん」と懐いてくる妹だけは、幸せにしてみせると。

それがこれだ。大学受験に失敗し俺は浪人になった。祖母に出して貰った予備校のためのお金で俺はこの《ドリーム》を買った。最低だと思う。高校生になった栞にも軽蔑された。祖母は何も言わず、家でゲームをする俺に料理を作ってくれている。心が痛まない訳じゃない。だけど何かをする気になれないんだ。

そう言えば、栞は今友達の家泊まりに行って居るんだっけ。あいつもゲーム好きだから、もしかしたらその友達と《Blade Online》のサービスが開始されるのを待っているかも知れないな。

そんなことを考えてる内に、デジタル時計が十二時と表示する。俺は《ドリーム》の電源を入れ、《Blade Online》を開始した。目の前が少しずつ黒く染まり、やがて闇に落ちていった。

《Blade Online》の世界、ヨーツンヘイムにはモンスターが跋扈する、まだ誰も足を踏み入れたことのない場所がいくつもある。プレイヤー達はその場所を探索し、奥にいるボスモンスターを倒して次のステージに向かっていく事になる。

使用できる武器はさまざまで、片手剣、双剣、大剣、太刀、斧、槍などが存在する。まだ明かされていない武器もあるようだ。ただしこの世界には魔法という物がない。なのでプレイヤーは武器を手にし、自らの腕でモンスターを倒すことになる。それだけ聞くとあまり面白みのなさそうなゲームに聞こえるが、魔法の代わりに《スキル》や【称号】がある。プレイヤーはこれらを上手く使えるかが勝負の分かれ目となってくる。

武器は最初を選ぶことが出来るが、しばらく変更することが出来ないため慎重にしなければならぬ。β版で俺が使っていた太刀は全てが中途半端で、ハズレ武器とされている。だが、敢えて俺はハズレを引くね。レベルを上げていけば凄い技が出るかもしれないしな。

《Blade Online》のスタートメニューで太刀を選ぶと、ようこそブレイド・オブ・オンラインへという文字が浮かび、俺は眩い光に包まれた。

1（後書き）

誤字脱字、感想を頂けると嬉しいです。

2 (前書き)

短くてすいません。次回から多くなっていく予定です。

目を開くと真っ白な壁に覆われた大きな部屋の中にいた。周りには俺と同じプレイヤーが立っており、隣の人と何やら話していた。人の気配や熱気までリアルに感じられる。《ドリーム》のゲームって気配とか熱気とか細かい所にリアリティが無いから、やっぱ《Blade Online》ってすげーんだなあと再確認する。

つか、みんな大剣とか槍で武器に太刀を選んだ奴が全然居ないぞ……。β版をプレイした奴が作った攻略WIKIに、太刀はハズレ武器って書かれてたけど、そんなにハズレなのか……。確かに攻撃力でもリーチでも攻撃速度も全部半端だけだし……。しかも結構扱いが難しいし。だけど敢えて太刀にしようってプレイヤーはいないのかよ……。きつと俺以外にも居るんだろうけどこりゃ相当少ないかもな。

この部屋に入れられてから十分程して、プレイヤーの一人が悲鳴を上げた。周りがそれに注目する。

「ログアウト出来ねえぞ!？」

そんな馬鹿な、とステータスを開き、画面の右上に表示されるログアウトボタンを探す。……無いぞ。嘘だろ。

周りのプレイヤーがざわざわと騒ぎ出す。折角のゲームだって言うのに運営がいきなり転けたな。というかいつまでこの白い部屋に入っていないかやいけないんだよ。このまま出られないのではないか、そんな考えが頭をよぎる。

その時、部屋の壁に四角いスクリーンの様な物が現れた。画面にはテレビの砂嵐のように白い線と黒い線が動き回っている。プレイ

ヤー達が黙ってそれに注目していると、そこから低い男の声が流れ始めた。

『約三万人のプレイヤー諸君、これから私が言うことを良く聞きたまえ。ログアウトボタンが無いのは運営のミスではなく、最初からそういう仕様になっているからなのだ』

プレイヤー達が再び周りと話し始める。

どういう事だ。ログアウトボタンが無いのが仕様？　つまり故意にログアウトボタンを消したのか？　訳が分からない。

早いところガロンと合流したいが、この部屋にいる人間はかなり多い。ここから探し出すのは難しいだろう。

『それと現実世界からの干渉はほぼあり得ない。この世界では君たちの思考が《加速》されている。詳しい説明は省かせてもらうが、この世界での一年は現実世界での一秒にも満たない。ゲームを攻略せずにここから出られるとは思わないことだ。

プレイヤー達から上がる怒声や悲鳴を無視し、スクリーンからの声は続く。

『それとこの世界での死は現実での死に繋がる。君達プレイヤーの命、HPバーが無くなった瞬間、現実世界での君達の脳に特別な電波が送られ、ショック死する』

空気が死んだ。今まで面白半分に騒いでいた連中も顔を引きつらせ、スクリーンを凝視している。俺は現実で死んだような生活をしてきたからこっちに来てても変わらない、なんて考えは浮かんでこない。やべえぞ、これ。嘘だろ？

『諸君らに伝えることはこれで終わりだ。最後にこのゲームを作った者の一人としてアドバイスをおこつ』

今まで無機質で淡々と喋っていた男の声に、僅かに楽しんでいるような色が混ざる。

『ここにいるプレイヤーは様々な武器を選んだことだろう。大剣、斧、槍、片手剣、双剣、そして……太刀。プレイする前に攻略サイトを見ていた者は知っていると思うが、太刀はハズレ武器だ。威力では大剣に劣り、リーチでは槍に劣り、持ち運びやすさでは斧に劣り、手数では双剣に劣る。外見から太刀の方が片手剣より強そうなイメージがあるかもしれないが、片手剣は攻撃力は低いが空いた手に盾をもてるし、動きやすい。つまり太刀は全武器の中で一番弱い武器だ。これから命をかけてゲームをするのだから、仲間はよく選んだ方がよい。太刀なんて選んで足を引っ張られたら目も当てられない』

え？　ちょ、待つてくださいよ運営さん。太刀、そんなに弱いんですか？　こんなに格好いいのに？　つかなんでそんな武器作ったんですか？

周りのプレイヤーが一斉に俺の方を見てくる。視線には同情と蔑みが含まれていた。いや、お前らもそんな真に受けんなよ！

『ではこれより君達を最初の街の広場に転送する。そうしたら即行動に移すことをおすすめる。ポップするモンスターは無限ではないから経験値を稼ぎたいのなら迅速に行動することだ。では、命運を祈る』

スクリーンが消え、再び眩い光に包まれた。

Name:	暁
Lv1	
Weapon:	太刀『錆びた刀』
Skill:	
Title:	
Strength:	10
Agility:	10
Endurance:	10
Vitality:	10
Dexterity:	10

2（後書き）

Skillはスキル、Titleは称号です。Strengthは筋力値、Agilityは俊敏さ、Enduranceは耐久値、Vitalityは体力値、Dexterityは器用さです。これらは作中では基本的に日本語で書くつもりです。なんで英語にしないかというと、ややこしくて間違えるような気がするからですw
すいませんw

誤字脱字、感想を頂けると嬉しいです。

俺が太刀を選んだのはハズレ武器だからというだけじゃない。ハズレに挑戦してやる、という気持ちがあったのは嘘ではないが本当の理由は他にある。それは、俺が剣道をやっていたからだ。太刀の長さや形が剣道でよく使う竹刀や木刀に似ていたため、振り慣れている物に近い武器を選んだ方がプレイしやすいと思った。だけど、まさかその選択のせいでこんな事になるとは思わなかった。

ヨーツンヘイムの世界でプレイヤーが最初に訪れる街の名前は《セーフティータウン》。その名の通り、モンスターが近寄らない安全な街だ。未攻略エリアを攻略するとそこに新しい街を作る事が出来るため、中盤あたりには全く使われなくなるだろうが、序盤ではプレイヤー達の拠点となる重要な街だ。

《セーフティータウン》に転送されたプレイヤー達の行動は三つに別れた。すぐにソロでエリア攻略に動き出す者、仲間を募集してパーティーを組む者、助けが来ると信じて何もしない者。俺は助けが来るとは思わなかったし、β版をプレイしているとはいえ単独で行動するのは危険だと思ったので仲間を集めることにした。したのだが……。

「ガロン、なんでだよ！　一緒にパーティー組もうって言ったじゃないか！」

《Blade Online》のプレイヤーのために作られた大きな掲示板を利用し、ガロンとその仲間三人と合流したのは良かったのだが、仲間にはなれないと断られた。理由は太刀だから。太刀がハズレとはいえ仲間が多い方が良い、と反論したのだがガロンの仲間の一人が「お前は信用できない」などと言いやがった。ガロン

とこの仲間達は他のゲームで知り合い、何度も現実であつて居るらしい。β版で知り合っただけの俺に背中を合わせる危険は犯せないんだと。まあ街を出てモンスターが出るエリアに行けばPKプレイヤーキリングが出来てしまうので警戒するのは分かるけど……。酷すぎるぞ……。

ガロンの背は180?を越えており、百七十五?ほどの俺は見下るされる形になる。背中に背負っている大剣と合わさって凄まじい迫力だ。ガロンは申し訳なさそうに、だが有無を言わさぬ口調で「すまない」と頭を下げると仲間と共にどこかへ行ってしまった。

因みにこのゲームは顔や髪の色など細かいところは変えられるが、骨格は大きく変えられない。何故なら、骨格を変えて身長を高くしたり低くしたりすれば重心がズレ、上手く動けなくなってしまうからだ。俺は顔とか髪は殆ど弄っていない。まあ今はそんなことはどうでもいいや。

「おい、あいつ太刀だぜ」「運営側にまであそこまで言われるって……」「仲間にしたら足引つ張られそうだよな」

俺の姿を見たプレイヤー達は皆馬鹿にしたような視線を向けてくる。嫌な予感がした。

その嫌な予感はすぐに的中した。誰にも仲間になつて貰えないのだ。太刀と言うだけで避けられ相手にされない。ありえねえ……。いくら運営があんな事言つたからってこれは極端すぎる。この非常に慎重になるのは分かるけど、そこまでしなくても言いジャン……。絶対仲間は多い方が良いんだしさ……。

それから一時間程度街をウロウロして仲間を作ろうと頑張つたが、全て断られてしまった。ならば同士を、と太刀の人を探してみたがソロで攻略しに行ったのか、上手く仲間を作れたのか、宿に引きこもっているのか、どこにも居なかった。

……………。

これは正直マジでやばい。ソロで動くにも出遅れてるし、仲間も出来ないしやばい。宿に引きこもる気は全くない。

掲示板で仲間を募集してみたら、『太刀使い乙www』とか『暁必死だなww』とか書かれていた。掲示板は名前を出すことも匿名にすることも出来るため、俺の募集に書き込んだ奴らはみんな匿名だった。最悪だ。結局仲間見つからなかったし。

しばらく呆然としていたが立ち止まっているわけにも行かないので、β版の知識を生かしてエリア攻略に行くしかない。どうせレベル上げに丁度良い場所はもうプレイヤーでいっぱいだろうし……はあ。

第一攻略エリア《ワイルドフォレスト》にいるモンスターは大して強くない。だが囲まれてしまえば終わりだし、レベル1で行くには危険だ。だが仕方ない。この太刀使い暁が一人で攻略してやろう。NPCがやっているショップに行き回復薬などを揃え、俺は《ワイルドフォレスト》に出発した。のだが、その途中で妹にあった。

「朶？」

「兄さん……」

妹も外見を殆ど変えていなかったようで、一目で分かった。流れるような黒髪と雪のように白い肌、スツと高い鼻。同じ親から生まれたとは信じられないほどの美人だ。やはりゲーム好きのお前もこれをやっていたのか……。

妹の周りには、妹と同じ高校生ぐらいの女の子二人と男が二人いた。パーティーを組んだのだろう。勿論この中に太刀使いは居ない。妹は片手剣使いだ。

「兄さん？ こいつもしかして掲示板で馬鹿にされてた太刀使いじゃ……」

男の一人が困惑したように妹に話し掛けるが、妹はそれを無視して俺を睨み付けてきた。その迫力に思わず後ろに一步引いてしまう。

「現実でも役立たずの貴方はこっちでも役立たずだったようですね。誰にもパーティーを組んで貰えなかったみたいですが当然です。私達もあなたをパーティーに入れるつもりはありませんので。話し掛けないで下さい」

周りの仲間が「良いのか？」と聞くが妹は何も言わず、俺に背を向けて歩いていつてしまった。仲間は妹と俺を見比べ、しばらくして頭を下げると妹について行ってしまった。

俺はしばらく呆然と立っているしかなかった。他のプレイヤー達に見捨てられるのはまだ良い。だが肉親である妹にまで見捨てられたというのは結構堪えた。何もせず祖母の家で金を貪っていた俺が悪いとはいえ、今は命に関わるかも知れないという緊急時だ。それなのに見捨てられた。悲しみと同時に怒りが沸き上がってくる。

「……行くか」

妹のことは取り敢えず後回しにしよう。今は攻略の方が大切だ。

《ウィルドフォレスト》にβ版で出てきたモンスターは、スライム、巨大芋虫、グリーンスマイル、フロートボールの四種類だけだ。最奥部に居るボスはハングリーツリー。

ボスとはかくとして出てくるモンスター単体ならレベル1でも何とか倒せる。ただしモンスターが一体とは限らない。囲まれたら大分厳しいだろう。

ゲームの中だからかイマイチ緊張感が足りない気がするが、『ワイルドフォレスト』の入り口が見えてきたあたりで気を引き締める。中には多くのプレイヤーが居るだろうが、基本的に自分の力で進まなければならない。パーティーなら別だけど……。

「ん？」

入り口の手前の空間が微妙にひび割れていた。ゲームによくある背景がおかしくなるやつか。最先端のVRMMOとはいえ、まだ完全じゃないようだ。これって触ったらどうなるんだ？ ひび割れていた部分を指でツン、と突いてみるとその部分から全体が砕けていき、大きな穴が出来た。

「なんだこ、れ！？」

穴の中を覗き込もうとした瞬間、何かに引っばられて中に引きずり込まれた。穴はどこかに繋がっていたようで、俺は頭から真逆さまに落下していった。

おい運営。バグくらいちゃんと直せよ……。

3（後書き）

誤字脱字、感想を頂けると嬉しいです

地面に叩き付けられた痛みを堪えながら、何とか立ち上がる。それから高いところから落ちるとダメージを受けるのを思い出し、HPバーを確認したが変化はなかった。バグのお陰かどうかは知らないが、どうやら落下ダメージは無かったようだ。それなら落ちたときの痛みも無しにして欲しかったな。

それにしてもここはどこだ？ 巨大な樹が生えていることから森の中というのは分かるが、『ワイルドフォレスト』にこんな場所はなかったはずだ。それに雰囲気が違う。上手く説明できないが、ここは嫌な空気が流れている。何かが潜んでいそうな、いるだけで不安になってくる。

現在地点を確認するためにステータス画面を開いてみる。頭の中で出てこいと念じるだけでステータス画面を出すことが出来る。視界に現れると言うよりは脳内に表示されると言っただ方が正しいのかも知れない。ステータス画面は自分以外の人間には見ることが出来ないし。

ステータス画面には自分の現在地点を確認できる機能が付いている。俺は自分の居る場所を確認して顔を顰めた。

現在地点、『ブラッディフォレスト』。

どこだよ。β版でプレイしたときにこんなダンジョンは発見されなかったぞ。と言うことは少なくとも『ワイルドフォレスト』よりはモンスターのレベルが高いと言うことだ。これはやばいかも知れん。下手したらモンスターから一発攻撃されるだけで即死、なんて事もありえる。

しばらく周りを見回してみたが樹のせいで遠くに何があるのか分からない。葉の隙間から僅かに漏れている太陽の光がいつなくなる

とも分からんし、動くしかないか？

この世界はリアルだから朝昼晩と時間の流れがちゃんとあるし、季節や天候も変化する。今は昼過ぎだろうか。夜になれば視界は最悪だし、夜行性のモンスターもいるかもしれない。

しょうがない。探索するとするか。

バキバキバキと樹の枝が折れる音に続き、獣の低い唸り声が響く。それからシャカシャカと地何かが地面を移動する音が聞こえ、地面が震える。

俺は苔生して緑色になった樹の後ろに隠れ、モンスター同士の戦いを見ていた。緊張のせいで荒くなった自分の息と心臓の音がうるさい。

しばらく森を探索していると巨大な熊のようなモノが寝ているのを発見してしまった。地面の上で大の字になっていびきをかいているそれは、間違いなくモンスターだ。それもレベルの高い。

モンスターはHPバーの上に名前が表示されるようになっていた。ただし、モンスターのレベルが自分よりかなり上の場合、『？？？』と表示されるようになっていた。この熊のHPバーの上にはハテナマークが浮いていた。つまり俺よりもレベルはかなり上だ。

今寝ていると言うことは夜行性のモンスターだろう。刺激を与えなければ起きることはない。触らぬ神にたたり無し、ここはスルーしていこう。

そう思っていると、いきなり紫色の液体が熊の腹部に付着した。何かが溶ける音がして熊のHPが僅かに減る。

熊が起きた。

おもむろに立ち上がって血走った目を見開き、大きな口を開いて咆哮する。そのあまりの迫力に俺は立っていることが出来なかった。

その場で膝をついて耳をふさぐ。恐らくこの熊は威圧系のスキルを持っているのだろう。威圧系は自分よりレベルが低い者の身動きを鈍くする。

想像以上にやばいな……。もし見つかったら逃げることも出来ずに殺される。

咆哮が終わった熊は自分の眠りを妨げた者を睨み付ける。視線の先にいたのはこれまた大きなサソリだった。熊よりは小さいがサソリの常識から考えるとかなりでかい。全身が紅色の殻で覆われている。かなり堅そうだ。

サソリは三体おり、六本の足を使って熊を取り囲んだ。サソリもレベルが離れているようで名前が表示されない。どうやらこの森にいるモンスターは俺のレベルを遙かに上回って居るみたいだな……。おい運営早く助ける。

睨み合う熊とサソリ達。先に動いたのはサソリだった。もの凄い勢いで一斉に熊に突進していき、その鉄で殴りつけた。熊のHPが一割ほど減る。熊は自分の正面にいるサソリに向かって爪を振り下ろした。鉄と鉄をぶつけたような鈍い音が響き渡る。やはりサソリの殻は堅かったようだ。それでも攻撃を受けたサソリのHPが30%ほど削られていた。恐るべし熊の攻撃力。

熊の攻撃は止まらない。他の二匹にも爪を叩き付ける。両腕をブンブンと振り回しながらサソリを殴りつける熊。結構シールドだ。サソリも負けていない。瘤のついた尻尾の先端を熊に突き刺す。熊のHPが減少すると同時に紫色に変色する。毒状態だ。やっぱ毒をもってやがったか……。

毒状態になるとHPが少しずつ削られていく。毒消しを飲めば消せるし、しばらく立てば毒状態からも解放されるのだが、強敵と戦っている時に毒状態になるのはまずい。

どういう訳か、樹は腐って脆くなっていたらしい。そのまま倒れていく。その先には全身真っ赤な熊さんが。樹が熊に当たって砕ける。

やべえっ、気付かれる！ 急いで逃走しようとした俺の耳に、熊のどこか哀しげな叫びが聞こえた。恐る恐る振り向いてみると、熊が光の粒となって天に昇っていく所だった。

え？

レベルアップ音が脳内に響いた。というよりはもの凄い連続して聞こえてきた。

ポーン、レベル1になりました。ポーン、レベル2になりました。ポーン、レベル3になりました。ポーン、レベル4になりました。ポーン、レベル5になりました。ポーン、レベル6になりました。

β版の時は聞こえただけで飛び跳ねて喜んだ電子音が続く。

……………。

その後、音はレベルが26になった所で止まった。続いて脳内に文字が浮かび上がってくる。

スキル《ステップ》《ジャンプ》↓《二段ジャンプ》に変化しました《隠密》《見切り》《察知》《受け流し》《ライト・スクエア》《クリア・スタブ》《兜割り》《抜刀斬り》《侍の迫力》を会得しました。

称号【畏土】【下克上】【隠密者】【???】を獲得しました。

もう訳が分からん……………。

4 (後書き)

二段ジャンプは固有スキルでしたが外しました。しよぼいので…。

あの熊のHPはサソリ達によって本当にギリギリまで削られていたようだ。倒れてきた樹にぶつかっただけで死んでしまうほどに。それと俺の凄まじい勢いでレベルアップには理由があった。モンスター同士が戦った場合、勝者は倒したモンスターの経験値と幾つかのアイテムを自分の物に出来るのだ。いくらレベルが離れているとはいえ、熊一体であそこまでレベルアップする筈がない。サソリ達の間も含まれていたようだ。

と、俺はあの後探索して見つけた洞窟の中で先程の出来事を自分の中で整理していた。この洞窟はどうやらプレイヤーのための休憩地点のようだ。洞窟内は温かく奥の方にわき水が溜まっている。入り口のすぐ側に生えている樹には何種類かの果物もなっていたし、何よりモンスターが入れなくなっている。ステータスから見る事が出来るマップは、この洞窟をモンスターが侵入できない、安全を表す青色で表していた。

「ふう……」

洞窟の壁にもたれ掛かり一息つく。

色々なことがありすぎて頭がおかしくなりそうだった。だが、こんな時こそ冷静にならなければならない。取り敢えず熊を倒したことでアイテムボックスにアイテムが入っている筈だ。まずそれを整理しよう。

ボックスの中には《セーフティタウン》で買った大量の回復薬や解毒剤などの他に見たことのないアイテムが入っていた。

所持品：回復薬×10、解毒剤×5、スタミナドリンク×5、赤

熊の毛皮×2、赤熊の爪、赤熊の生肉×4、太刀『血染め桜』、紅殻蠍の剛殻×7、紅殻蠍の鋏×3、紅殻蠍の毒尾、紅殻蠍の毒肉×10、魂の欠片×10

どうやらモンスターの一部が大量に手に入ったようだ。この手のアイテムは武器や装備を作ってくれる鍛冶屋に持って行くと、モンスターに応じた武器や装備を作ってくれる。まあ未攻略エリアにはそういった店はないからハッキリ言って今はゴミだな。

因みにアイテムの解説を見て分かったのだが、あの熊の名前はブラッディーベアーで、サソリの方はシールドスコピオン亜種らしい。亜種って何だよ亜種って。

モンスターの一部を今はただのゴミと言ったが、肉系のアイテムは違う。このゲームには空腹の設定があり、定期的に何かを食べないとステータスにペナルティを負ってしまう。最終的には餓死してしまうとか。さっきつけた果物以外に食べる物が無い俺としては、肉は命を繋ぐ大切なアイテムだ。ただ毒肉って書いてある方は食べると数秒間毒状態になってしまう……。

「おお……」

そして太刀『血染め桜』。ごく僅かな確率でモンスターから武器や装備を手に入れられる事があるが、まさかいきなりゲット出来るとはな……。今俺が装備している太刀は『錆びた太刀』。かなり頼りない。ゲットできたのはかなりの幸運と言える。ただ、武器を使用するには“筋力値”が必要になる。

重い武器を装備して振るには当然筋力がある。筋力値とはプレイヤーの筋力を表すステータスの一つだ。筋力値が高ければ攻撃力も上がるし、鍛えておいて損はない。

筋力値の他にも“俊敏さ”“耐久値”“体力値”“器用さ”と色々あり、どれもレベルを上げていけば自然と鍛えられていく。レベ

ルを上げる以外にも鍛える方法があり、筋力値と耐久は武器で素振りしたり筋トレをする事で、俊敏さと体力は動き回ること、器用さは武器を作ったり鍛冶をしたりすることで上げることが出来る。レベルとこれらのステータスを上げていくことが、このゲームの醍醐味だ。

少し話がずれたが、取り敢えずしばらくは武器に不足はない。と言っても筋力値を上げる必要がありそうだが。

後は魂の欠片。これは即死攻撃を受けたとき、HPを10まで回復する事が出来るアイテムだ。β版の時は入手することはなかったが、かなりのレアアイテムと聞いている。もちろん使い捨てだ。

アイテムは大体把握できたし、次はスキルと称号だな。

スキルとはプレイヤーのHPバーの下に表示されるスタミナバーを減らす事で使用できる特殊技だ。普通の人間では出来ない素早い動きや攻撃、防御などを可能とする。中にはスタミナを消費しないスキルもあるが、大体はスタミナを使う。スタミナが無くなればスキルが使えなくなり、回復を待つしかない。

スタミナはHPと同じでレベルアップすれば総量が増えていく。体力値を上げることでスタミナは増やすことが出来る。

スタミナを使い切ってしまったときは、自然回復の他にスタミナドリンクを飲むことで回復することが出来る。スタミナが切れるとピンチになるのでスタミナドリンクは欠かせないアイテムの一つだ。

「さてと……。どれどれ会得出来たスキルはつと……。おお」

ゲットしたスキルはなかなか便利な物が多かった。《侍の気迫》は自分よりもレベルが下の者のステータスを若干下げるスキルだ。この森では使えないだろうけど……。初めて見るスキルも幾つかある。今この森から出ることが出来たらトップランカーになれるん

じゃないか？

因みに今の俺は他のプレイヤーの様子を知ることとは出来ない。さつき掲示板を見ようとしたらエラーという文字が表示された。クソ、バグのせいか。運営エ……。時間を加速するとかそんな技術使う暇があったらバグくらい消せよ……。

次に称号。これはプレイヤーの行動がその称号の入手条件を満たしていると手に入れることが出来る。持っているだけでステータスが上がりするので手に入れておいて損はない。

でも今回手に入れた称号、俺何にもしてないのに入手条件が満たされていたのか？ バグによってここに来たのだから変なことがあるのもおかしくないからな。

【闘士】は頭を使って自ら手を下さずに何体かモンスターを倒した場合に手に入る。器用さがあがる称号だ。確かにブラッディベアを倒すときに手は下してないけどさ……。

【下克上】はその名の通り自分よりレベルの高いモンスター、もしくはプレイヤーを倒したときに手に入る。ステータスが全体的に上昇する便利なスキルだ。これは結構入手にくい称号なのでラッキーだったと言える。

【隠密者】……これはβ版では出てこなかったから入手条件は分からないな。俊敏さを上げ、《隠密》の効果を上げる力がある。

最後だが……。【???】。これはよく分らん。説明には何も書いてないし、バグのせいなのか？

取り敢えずこれでブラッディベアを運良く倒せた事によって手に入れたアイテムやスキルを一通り整理できた訳だが……。

俺、これからどうしたらいいんだ？

赤熊の生肉を頬張りながら、俺はこれからの事を考えていた。夜になったようで外はもう真っ暗だ。大きな何かが動き回っている気配もするし朝までは出ない方が良さだろう。今日はそのまま洞窟の中にいよう。

赤熊の生肉はとても美味かった。食感はふにやふにやで生肉そのものだが、何故か塩胡椒の味が付いていて食べられた。現実なら食あたりとかになりそうだがこの世界ではそんな物はないから大丈夫だろう。一口食べるたびに全身に力が漲ってくるようだ。スタミナが僅かに増えていくのが見える。きつと焼いたり料理した方が美味しいのだろうが、道具がないのだからしょうがない。そう言えば料理用のスキルとか合ったはずだし、もしこの森から抜け出すことが出来たら調べてみるか。

「はあ」

こんな化け物だらけの森から本当に出られるのだろうか。外に出るだけでも命懸けだというのに。恐らく今の俺ではブラッディベアーはおろかシールドスコープオン亜種（次から面倒なので普通に呼ぶ）にも勝てないだろう。『血染め桜』はかなり強いだろうが必要筋力値が高くて今の俺には使いこなせないだろうし、スキルも上手く使いこなせないだろう。レベルが上がったとはいえ筋力値などのステータスは殆ど上がっていない。今の状況で外に出るのは自殺行為だ。

はあ。考えるのは明日にしよう。肉を食ったお陰で腹もふくれたし、眠くなってきた。今日は取り敢えず眠ろう。

翌朝、熊肉を食べて湧き水で喉を潤した俺は『血染め桜』で素振りをしていた。かなり重くて少し振っただけで手が痛くなってきたが、振り続ける。

急に素振りを始めたのにはちゃんと理由があり、剣を振ることで筋力値や体力値を上げることが出来るし、太刀の熟練度を上げることが出来るからだ。熟練度とはその武器をどれだけ使いこなせているかを表した物だ。ステータスも熟練度もモンスターと戦った方が上がりやすいけど、戦ったら瞬殺されそうなので地道にトレーニングしていくしかない。頑張ろう。

昼。熊肉を食べて少し休憩した後、今度は手に入れたスキルを使って練習を始めた。スキルも熟練度と同じように使えば使うほどレベルが上がっていく。スキルレベルが上がれば効果が上がるので、どんどん使った方が良い。

《ステップ》を使って何度も何度も色々な方向に動き回り、スタミナが切れたら休憩して回復させる。その後《二段ジャンプ》を何度も何度も使う。《二段ジャンプ》は一回飛び上がった後、まるで空中に足場があるかのようにもう一度跳ぶ事が出来る。これは結構スタミナを使うようで、すぐに休憩しなければならなくなった。

一つのスキルで体力が尽きるまで練習し、スタミナが回復したら違うスキルを使う。これを何回も何回も繰り返す。

「《ライト・スクエア》！！」

発動と同時に剣が青色に輝き、四連続で目の前の空間を斬り付ける。ライト、と付いているように威力はそこまで高くない。その代わり、消費するスタミナが低く何発も使うことが出来る。何発も使えと言っても、スキルを一度使うと一定時間次のスキルを発動できなくなるので途切れ途切れだが。

こうしてトレーニングをしていると、あっと言う間に夜になってしまった。全身が筋肉痛で痛い。クソ、筋肉痛とかこんな設定要らないだろ！ リアル過ぎるぞ……。

最後の熊肉を食べ湧き水を飲んだ俺は疲労によつてすぐに眠りに落ちていった。

次の日、あのサソリの肉を食べるのはどうも気が引けるので、洞窟の前に生えていた木の実をいくつか取ってきた。三種類ある。

「……………」

三種類の木の実の内、一つしかまともなのがない。ファイルの実は体力を回復してくれる木の実だが、残りのボレロの実は食べると毒状態に、ビレレの実麻痺状態になることが分かった。出来ればファイルの実だけを食いたいところだが、これらの果物は一日三つずつしか採取できないみたいだ。果物一つだけではお腹はふくれないし、ボレロの実とビレレの実も食べないと空腹からは逃れられない。

……取り敢えず、朝はファイルの実を食べておこう。ビレレの実の麻痺状態は体力には影響ないから安全地帯のここなら食べても問題ない。ボレロの実の毒状態も体力が0になるまで続くことはないだろう。だが朝から食べるのはモチベーションが下がるので、ファイルの実を二つ食べておくことにした。

昨日と同じように昼まで素振りをし、ビレレの実を三つ食べる。全身が痺れて動けなくなったが数分の事だったし、空腹はちゃんと解消された。それからスキルのトレーニングをする。

夜はボレロの実を三つとファイルの実を一つ食べた。毒状態は全身が熱くなり胸がじくじくと痛んだ。幸いなことに毒状態は短くファイルの実を食べれば大体回復することが出来た。空腹も解消できたし、

もう寝よう。

それから俺は毎日果物を食べながら素振りやスキルの練習をし、ステータスを伸ばしていった

あれからいったいどれくらい経っただろうか。ちゃんと数えていないから正確なことは分からないが、少なくとも二ヶ月くらい経ったと思う。

ゲームの中なのに体臭が大変な事になってきている。数日に一度湧き水で体を洗っているけどそれにも限界がある。はあ……風呂入りたい。そう思いながら俺は今日も朝から修行を始める。

あの日以降、まだ俺は洞窟の外を探索しに行っていない。モンスターに殺される恐れがあるし、出口がないと思っっているからだ。

このゲームで新しい攻略エリアを出すには既に出ているエリアをクリアして次のエリアへ繋がる入り口を見つけなければならない。見つかるまで入り口は閉まっている状態だ。なので例え前のエリアからここに来るまでの入り口を見つけても外に出れる確率は低い。だからここで修行してプレイヤー達がここに来るのを待っていた方がいいのだ。……だが、そうは分かっているけど最近外を探索したいという気持ちが押さえきれない。誰も助けに来ないんじゃないかという不安ともしかしたら出口があるかも知れないという希望が合わさって、外に出て行こうという気持ちが心の中に生まれていた。

その日の修行を終えた俺はついに外を探索しに行く決心をした。あれから大分熟練度やスキルレベルも上がったし、もしかしたらこの森でもある程度通用するかもしれない。太刀の熟練度が上がったことで称号【太刀初段】と【太刀二段】を手に入れたし、『血染め桜』も上手く扱えるようになってきている。回復用のアイテムもまだ手を付けてないし、HPを回復するファイルの実も食わずに幾つか残してある。

「よしっ」

湧き水で体を拭き、明日の朝探索に行くことにした俺は横になって目を瞑った。ゴツゴツした床の感覚にも大分慣れてきた。

今、他のプレイヤー達はどうしているのだろう。まさか全滅してないだろうな。俺だけ生き残っているとか……。まあそんなことはないだろう。パーティーを組んでいればよほどのことがない限り死ぬこともないだろう。

妹やガロンとその仲間はまだ生きているだろうか？ あの日見捨てられたことは思い出すだけでも腹が立つてくる。ここから生きて帰れたら何か文句でも言ってやりたい。何て言ってやろうか、そんなことを考えている内に俺の意識は闇に落ちていった。

翌朝。

洞窟前の三種類の果実を持ってきて、ファイルの実をアイテムボックスにしまう。朝食はビレレの実にすることにした。ビレレの実三つを胃に収め、いつものように麻痺状態になって倒れる。もう毒や麻痺の状態以上にも慣れてきた。でもシェルドスコープイオンの肉だけはまだ食べていない。何か怖いからな。

腹も膨れたしそろそろ洞窟の外を探索しに行こうか。この洞窟にはモンスターは入れないようになっていて、何かあったらすぐに帰ってくればいい。『血染め桜』で何回か素振りをし、俺は洞窟の外へと足を踏み出した。

薄暗い森の中、《隠密》を発動しながらゆっくりと移動する。風で揺れる葉と薄暗さが相まって森はかなり不気味だった。今のところモンスターに出会ってはいない。

このような自然系のエリアのモンスターには夜行性が居る場合がある。夜行性のモンスターは朝や昼には寝ていて起こされても動きは遅い。だが夜になると目を覚まし、凶暴化する。

プレイヤー達は大体朝に攻略を始めて日が暮れる前に帰っていくので夜行性のモンスターにはあまり遭遇しない。だが、街の中央にある依頼板に貼られる依頼の中には夜行性のモンスターを夜に倒せとかあるので戦う事になるプレイヤーも多少いるはずだ。俺はβ版の時依頼で見ただけなので夜行性のモンスターと夜に戦ったことはない。

取り敢えず何が言いたいかというと、夜になる前には洞窟に帰らなければいけないと言うことだ。

探索を初めて三十分ほど経った頃、ついにモンスターを発見した。そいつは地面に生えた草を美味しそうに食べている。

全身が黄色の毛に覆われており、頭には長い耳が二本生えている。そして額から鋭い角が伸びていた。角の生えた兎のようだ。名前は見る事が出来ない。レベルが高いのだろう。

この兎、どこかで見たことがある。ホーンラビットという弱いモンスターがいたはずだ。そいつによく似ている。だけどホーンラビットはもつと小さかったし、毛の色は白だった。もしかして亜種という奴かも知れない。

……。でもこの兎に負ける気がしないんだよなあ。何というか、ホーンラビットはハツキリ言って雑魚だったし、目の前のこいつもそんなに強そうに見えない。レベルは離れていても勝てる確率が無い訳じゃないし……。よし、いっちょ倒してみるか。

ホーンラビットはこちらから攻撃を仕掛けなければ襲ってこない大人しいモンスターだった。亜種っぽいこいつがそうとは限らないが、草を食べている様子からして大人しそうだ。

太刀を構え《隠密》を使用したまま、ゆっくりと後ろに近づいてみる。真後ろに立って見たが襲ってくる様子はない。《察知》で周

りにモンスターがいなか調べてみたが反応はない。よし、やっ
やるか。

「はっ！」

一度剣を納め、《抜刀斬り》で攻撃を仕掛ける。《抜刀斬り》は
剣を抜きながら相手を斬り付けるスキルだ。他のスキルと違って連
続して違うスキルを発動できるため、結構便利。

いきなり斬り付けられた兎は悲鳴を上げて体を仰け反らせた。俺
はその隙を見逃さず、《ライト・スクエア》を発動する。青い光が
四連続で兎の体を通り、そこから血が噴き出す。

「っ」

兎がこちらを振り向き、角で突き刺そうと突進してきた。《見切
り》で兎の突進がどこにくるか分かった俺は、《ステップ》で右に
跳ぶ。スキルレベルが上がったおかげで《ステップ》する動きが速
くなっている。

かわされた兎は前のめりになりながら突進を止める。ホーンラビ
ットも攻撃を避けると隙が出来ていたから、やはりこいつも亜種か
何かだろう。

背後から《ライト・スクエア》で攻撃し、突進を《見切り》でか
わす。兎のHPバーは二割ほど削れていた。結構堅いな。そう思っ
ていると兎がこちらを向いたまま動きを止めた。突進してこないの
か？

次の瞬間、兎の体が黄色く光ったと思うともの凄い勢いでこちら
に突っ込んできていた。《見切り》で赤い攻撃予測線を確認できた
ときにはもう《ステップ》で回避出来る距離ではなかった。

「ぐっ！」

咄嗟に《受け流し》を発動し、兎の角を剣で一瞬だけ受け止め衝撃が来る前に刃を横にして威力を殺す。突進を完璧にかわすことが出来た。横に移動し樹に向かって突っ込んでいく兎を見る。角が樹に突き刺さって身動きが取れなくなっている。攻撃するチャンスだ。兎に駆け寄ろうとして両腕の痛み気付いた。HPを確認すると四割ほど減っていた。馬鹿な……。突進は完璧に受け流したはずだ。スキルを上手く使いこなせないと上手く受け流せない場合もあるが、今回は完璧だった。それなのにここまでダメージを負うなんて。直撃していたら即死してたんじゃないか？

恐怖に足がすくんだ。死の恐怖。

けどいつまでも突っ立っているわけにはいかない。攻撃自体はちゃんと通っているしあの突進にさえ気を付ければ何とかなる筈だ。アイテムボックスからファイルの実を食べてHPを回復する。ほぼ全部回復した。まだ兎は樹に突き刺さってジタバタしている。まだ攻撃できる。

急いで駆け寄り《ライト・スクエア》で斬り付ける。まだ兎はジタバタしている。スキルの反動が収まったので、再び《ライト・スクエア》を発動する。兎のHPは四割ほど減っていた。よし、いける！

《見切り》によって兎が振り向いて角で刺そうとする動きが予測できた。

洞窟の中での練習中、《二段ジャンプ》のスキルを使っていると『スキルが強化できそうですですが、強化しますか？』という文字が浮かび上がってきた。Yesを選択すると《二段ジャンプ》が消え、新しく《四段ジャンプ》が使えるようになっていた。

俺は《四段ジャンプ》で兎の突きをかわし、がら空きになった頭に向かって落下の衝撃を上乗せした《兜割り》を叩き込む。《兜割り》は防御力が高い相手に向かって使う打撃技だ。上手く決まれば相手を混乱状態にする事が出来る。

兎は悲鳴を上げフラフラと蹠踉けた。どうやら上手く決まっていた。混乱状態にする事が出来た。《ライト・スクエア》を何度も使い、順調にHPを減らしていく。残り二割ぐらいになった頃、混乱状態が解けた。突きを喰らわないように後ろに下がる。

黄色い光が見えた気がした。

「がはっ……」

一瞬何が起こったか分からなかった。自分の腹部を見ると角が刺さっている。マジかよ……。予備動作無しとか避けれる訳がないだろ……。刺された部分が熱い。HPはどうなったんだ……。HPバーはとつくにレッドゾーンに突入しており、もうほんの少ししか残っていないかった。もう一撃喰らえば終わりだ。

急いで回復薬を使わなければいけない……。だが体が動かなかった。アイテムボックスを使うことが出来ない……。嘘だろ……。麻痺かよ……。

この兎は相手を麻痺の状態にする力を持っていたようだ。やつば侮ってたみたいだな……。

兎が突進してくるのが見えた。

HPが0になった瞬間、いきなり体が光り出した。頭に『魂の欠片を使用しますか』という文字が浮かんでくる。すっかり忘れてた……。復活系のアイテム十個も持ってたじゃん。Yesを選択し、HPが赤のギリギリまで回復する。

目の前にいる兎。もう回復している暇はない。一か八か、《兜割り》で頭の横を殴ってやった。混乱状態にはならなかったが、蹠踉けて動きを止める兎。慌てて《ステップ》で距離を取ってファイルの

実をかじる。体力が半分くらい回復した。もう一つ食べて全快する。兎が体勢を立て直した。奴の体が黄色く光っていく。今度は予備動作があつたみたいだ。まだ九回復活できるとはいえあまり無駄にしたくない。《四段ジャンプ》を使って跳ぶ。空中で透明な地面を蹴っていく。兎はさっきまで俺が居たところを通って突き進み、また樹に突き刺さった。ジタバタする兎。

もう奴のHPは二割以下。

地面に降りた俺は《ライト・スクエア》を連発し、何とか兎を倒しきった。

ポーンとどこか間の抜けた電子音が連続し、レベルが一気に4上がった。スキルと称号は出なかったみたいだ。

今日はもう洞窟に帰ろう。

8（前書き）

お気に入り件数が50突破してビックリしました。読んで下さっている方、ありがとうございます。

あれから無事に洞窟までたどり着けた俺は、地面に倒れ込み目を瞑った。戦闘の疲労があまりにも激しくて起きてられなかったからだ。

死への恐怖。兎にトドメを刺された時の感覚は多分一生忘れられないだろう。もう助からないという絶望と諦め。モンスター一体と戦闘しただけでこの有様だ。こんなでこの森から出ることが出来るのか？ 頭の片隅でそんなことを考えながら、闇の中へ沈んでいた。

目を覚まして最初に感じたのは強烈な空腹感だった。外の果物を持ってきて全部食べたが全然足りなかった。回復のために取ってあるフィレの実は食べることは出来ないし、どうしようか。しばらく考えていると、サソリの肉の事を思い出した。正直サソリの肉なんか食べたくないけど、このさい仕方がない。アイテムボックスから紅殻蠍の毒肉を選択して取り出した。

「うわあ……」

出てきたのはサソリの殻に包まれた紫色の肉……のようなもの。正直もの凄くまずそうだ。……。でも腹が減っているし仕方がない。まずかったら食べるのを止めればいい。堅い殻を手で取り、紫色の肉を取り出す。手で触ってみた感じ、プリツとしていてエビのようだ。味はどうだろう……。恐る恐る肉を食べてみる。

「おっ」

結構美味かった。食感も味もまさにエビのようだ。塩味も効いて

いるしこれはイケる。一つ目を全て食べ終わったが毒状態になる気配はない。幸運なことに毒には当たらなかったようだ。もう一つ食べてみる。今度は流石に毒状態になってが、削られるHPは大した量ではない。もう一つ手にとって食べる。三つ目を食べ終わると脳内に文字が浮かんできた。

『スキル《毒耐性》を会得しました』。

おお、耐性系のスキルなんてあったのか。だったら麻痺耐性のスキルもあるかも知れないな。毒になる確率が下がり、しかも毒状態にいる時間が半減するようだ。これは良いスキルを手に入れた。

腹が膨れて満足した俺はまだ疲れが癒えてないのを確認し、湧き水で喉を潤した後もう一眠りすることにした。今日はもう一日休憩しよう。

次に目を覚ましたのは夕方だった。体を起こしてみると大分疲れが取れていた。この分なら明日には全快してそうだな。この手の疲労は回復薬やスタミナドリンクでは癒すことが出来ない。しっかりと休む必要があるのだ。

湧き水で喉を潤した後、俺はあの兎を倒したことでゲットしたアイテムを確認することにした。

手に入っていたのは、痺角兎の毛皮、痺角兎の角、痺角兎の尻尾、痺角兎の麻痺肉×2、痺角兎のモモ肉。

部位アイテムが手に入っても現状ではどうする事も出来ないためからあんまり嬉しくない。でも肉系のアイテムが手に入ったのは良かった。今回は三つか。麻痺肉は兎も角として、モモ肉ってのは何だか美味しそうな響きだな。

説明文によると、ホーンラビット亜種のモモ肉。引き締まった肉はとても美味で食べた者の動きが俊敏になる、だそうだ。

うむ……美味そうだな。今日は兎肉祭と行こうか。

アイテムボックスから麻痺肉×2とモモ肉を取り出す。二つとも生肉だけど多分食べられるだろう。まずは麻痺肉から食べてみるか。一口かじるとしつとりとした生肉の食感が伝わってくる。味はピリつとしており少し辛い。熊肉とはまた違った食感だ。あつちは堅かったけどこつちは柔らかい。美味かったので二つとも食べてしまふ。すると麻痺状態になって地面に倒れることになる。

麻痺状態が治るのをまっけていると、頭の中に『スキル《麻痺耐性》を会得しました』という文字が浮かんできた。やはり麻痺耐性のスキルもあつたようだ。これは《毒耐性》と同じでスタミナを消費しない方のスキルだな。毎日ボレロの実とビレレの実を食べてるから、確かに耐性が出来ていてもおかしくない。

麻痺状態が解けた俺はモモ肉を口にした。麻痺肉と違って弾力があつて美味しかった。食べ終わると『称号【俊足】を入手しました』という文字が浮かんでくる。今日何にもしてないのにスキルと称号が三つも手にはいるとか何か複雑な気分だな……。

夕食も食べ終えやる事が無くなった俺は自分のステータスを確認することにした。日頃の修行と今日の戦闘により大分上がっているはずだ。少しワクワクしながら、ステータスを開いてみる。

筋力値：100、俊敏さ：130、耐久値：50、体力値：90、
器用さ：60

ここに来たときとは比べ者にならない程に上がってるな。修行の成果も出ているし、今日の戦闘で筋力値と俊敏さ、体力値がかなり上がってる。耐久値と器用さは鍛えていないから高くないけど……。

自分の成長ぶりに満足した俺はもう寝ることにした。固い地面に転がって洞窟の天井を眺める。ゴツゴツとして堅そうだった……。明日からは今まで通りに修行をすることにしよう。外に出るのは

危険だ。だけど何とか勝つことが出来たし、あの兎ならもう少し鍛えれば死なずに勝てるような気がする。満足するまで鍛えたらもう一度兎に戦いを挑むことにしよう。当然一対一でしかやらないけどな。

8（後書き）

フィレの実は桃のような味。ボレロの実は柿のような味。ビレレの実はオレンジの味。と言う風にイメージして書いてます。

9（前書き）

あれから大分時間が経ってます。

あれから更に三ヶ月くらいたった。毎日修行をしてステータスが大分上がったのを確認して、一週間に一度くらい洞窟の外を探検しにいつていた。ホーンラビット亜種（面倒だからホーンラビット）戦い、死ぬことなく勝利出来ている。レベルもかなり上がり、現在は38だ。ホーンラビットの名前が表示されるようになったからレベルが近づいたんだな。

もうホーンラビットと戦って負けることも無くなってきたから、そろそろ次のステップを踏みたいと思う。ここ数回の探索でこの森にいるモンスターは大体分かった。そこまで奥まで潜っていないのでまだ発見していないモンスターも居るかも知れないが、現状では問題ないだろう。

確認したモンスターの数は十。名前が分からないのが四体ほどいた。シエルドスコピーオンとブラッディベアーも見かけたが、未だ名前は分かっていない。ブラッディベアーは兎も角、そろそろシエルドスコピーオンと戦って見てもいいかもしれない。《毒耐性》も手に入れたし毒にやられる可能性は低い。何より、ホーンラビットではもうレベルがあまり上がらなくなってきたいるのだ。魂の欠片もあることだし、少しぐらい冒険してみてもいいだろう。

ここに来たばかりの俺が聞いたら危険だからやめろ、と怒鳴られそうな考え方だ。だけど俺はチマチマ鍛えていてもこの森からは出ることが出来ないと判断した。一撃でHPが半分以上削られるようなら、即座に逃げるけどな。

少しずつ溜めていたファイルの実を確認し、俺はシエルドスコピーオンを探しに出かけた。

「うわああああ！」

やっぱコツコツレベル上げてれば良かった！俺はシエルドスコ
ーピオンの突進をギリギリでかわしながらそう思った。

一体だけで居るところを確認し、気付かれないように近づいてい
って《四段ジャンプ》で上まで移動し、落下の衝撃をプラスした《
兜割り》を叩き込んだ所までは良かったのだが、全くとって良い
ほどダメージを与えることが出来なかった。予想以上に堅かったよ
うだ。それから逃げようとしたのだが、このサソリ足が滅茶苦茶速
い。逃げようとすると回り込まれてしまい、洞窟まで帰ることが出
来ないのだ。

こいつにダメージを与える事が出来そうなスキルが《兜割り》の
他にもう一つだけある。《クリア・スタブ》だ。《クリア・スタブ
》は鎧などの隙間に刃を入れて相手に直接ダメージを与えるスキル
だ。あのサソリの殻にも効くかも知れない。だけどそれをするには
かなり接近しなければならない。近づけばあの鍔や尻尾で攻撃され
るだろうし、殺される気がして怖いから無理だ。

「うおっ！？」

サソリがまた突っ込んできた。《ステップ》で横に跳ぶが完全にか
わしきれず肩に少しだけ当たる。そのダメージでHPは二割ほど
削られた。ホーンラビットの時ほどレベルが離れていないのかもしれない。

キシヤアア！？サソリが悲鳴を上げドシン、と何かにぶつかる
音が聞こえてきた。サソリの方を見ると樹にぶつかって混乱状態に
なっている。この森のモンスターは樹にぶつかって自滅する奴が多
いみたいだな。

何はともあれチャンスだ。急いで駆け寄って《クリア・スタブ》で殻の隙間に刃を突き刺す。するとHPが少し減った。体に刃が刺さっている状態だと少しずつダメージを受けていく。俺は『血染め桜』をサソリの混乱が解けるまで刺し続けた。

混乱が解けるサソリ。《ステップ》で後ろに回避して攻撃をかわす。

それから殆ど夜になるまで、俺はサソリと戦い続けた。やはりサソリの攻撃力はそこまで高くなかったようで危ないところもあったが何とか倒しきる事が出来た。サソリは樹にぶつければ毎回混乱状態になるのでその隙に《クリア・スタブ》で攻撃する。これが続ければ結構楽に勝てる事が判明した。

レベルが一気に3上がるのを見て、もう数回倒せば名前が見れるだろうと確信した俺は、それから数日おきにシールドスコピオンを狩りに行くことにした。

もうここに来てからどれ程経ったか分からない。一年以上かもしれないし、それより少ないのかもしれない。未だにプレイヤー達はここに辿り着いていない。恐らくだが、ここは隠しエリアなのかもしれない。いくらモンスターのレベルが高いとはいえ、この森で一番強いブラッディベアーのレベルは50程度。今の俺のレベルは54だ。普通に攻略していれば他のプレイヤーはとくに到達していてもおかしくない。そのことからここは見つけにくい位置にある隠しエリアなのではないかと予想をたてた。だとしたら、ここから出ることが出来る方法はもう一つしかない。このエリアの主、つまりボスモンスターを倒すのだ。ボスを倒すと街にワープすることが出来るワープゲートが現れる。それを使って街に行くのだ。バグのせいでここに来たのだからワープゲートが使えない恐れがあるが、試

してみる価値はあるだろう。

「《ヘヴィ・スクエア》！！」

ブラッディベアーの大振りな攻撃を避けて懐に潜り込み、足を四連続で斬り付ける。《ヘヴィ・スクエア》は《ライト・スクエア》の上位スキルで四連続で相手を強く斬り付ける技だ。ヘヴィと言うだけあって攻撃力が高く消費スタミナも大きい。連発すればすぐにスタミナ不足になってしまうだろう。

足を斬られたことでバランスを崩したブラッディベアーは地面に倒れ込んだ。巨体に潰されないように《ステップ》で回避し、倒れたことによって低くなった頭を狙う。

このゲームには急所と呼ばれる部分があり、攻撃が完璧に決まると一撃死させる事が出来る。急所は心臓や首、うなじや脳天など現実でも急所とされる場所ばかりだ。これはプレイヤーだけではなくモンスターにも当てはまる。

《四段ジャンプ》で高くまで跳び上がり、落下の衝撃を乗せてブラッディベアーの脳天を突き刺す。

グオオオオオオオオオ！！！！

ブラッディベアーが断末魔の悲鳴を上げて消滅していく。急所に攻撃をしても即死させる事は難しいが、あそこまでしっかり突き刺すことが出来れば大丈夫だ。

あれほど強かったブラッディベアーですら、一体だけなら危なげなく倒すことが出来る。もうブラッディベアーを倒してもレベルが一気に上がるような事はなくなった。今では三体ぐらい倒さないとレベルアップする事が出来なくなっている。

この調子ならボスなんて簡単に倒せるだろう。もう一回レベルアップしたら倒しに行こう。

この時の俺はレベルが上がって調子に乗っていた。ゲームをやっている人なら誰でも分かるような事をすっかり忘れてしまっていたのだ。

9（後書き）

暁は何体ものモンスターと戦って、かなりレベルを上げています。
その様子を全部書こうかな、と思っていましたがそれだとあまりに
時間が掛かるので省略しました。

10（前書き）

急展開です。そう言えばOnlineがOnlineになってました……。滅茶苦茶恥ずかしいです。教えて下さったかたありがとうございます。オンラインじゃなくてオンラインとか¥（^^）ノ

慣れないのに無理に英語に直すからこんな事になるんだ……。これから懲りずに英語にしますが、間違いがあつたらこっそり、こっそり！教えて下さい！お願いします！

「チッ」

後ろから追いかけてくる巨大な蜂の大群を見て、俺は舌打ちをした。油断していた。まさかこのモンスターの巣が近くにあるなんて思ってた。思ってた。

キラビーは巨大な蜂のモンスターだ。レベル40を過ぎたときに名前を見ることが出来ていたためそこまで強くないだろう。いつも一匹で行動しているため、近くに巣があつて仲間を呼ばれるとは思っていなかった。一体や二体なら何とかなつただろうが後ろにいる蜂は優に三十体を越えている。勝てるわけがない。

鍛えた俊敏さを生かして何とか追いつかれてはいないが、今の俺は洞窟とは真逆の方向へ走っている。どこに行こうというのかね状態だ。いや意味が分からん。

目の前に迫ってくる樹をかわし、ひたすら前へと走る。

息が切れてきた。やばいな。もう体力が続かない。走行速度も下がってきているし、追いつかれるのは時間の問題だ。

どうする？ 死を覚悟して戦うか？

後ろから迫ってくるスズメバチを大きくしたような、オレンジ色の肌をしたキラビーを振り返って確認する。耳障りな羽音とカチカチと口をならす音が近づいてきている。

戦うことを決め背中 of 『血染め桜』を抜こうとした時、目の前の光景が今までと違うことに気付いた。土ではなく、石畳の地面が数メートル先に確認できる。もしかしたら、ボスモンスターがいる場所かも知れない。キラビーと戦って確実に魂の欠片を無駄にするぐらいなら、ボスと戦った方がまだ良い。太刀を抜くのをやめ、残る力を振り絞って石畳の場所まで走った。

予想は当たっていたらしい。キラービー達は石畳の部分からこちらに近づいてくることはせず、どこか悔しそうに羽音を響かせていた。さて、ボスを倒してここから脱出するのでしょうか。

先へ進んでいくと石で出来た神殿のような物が見えてきた。石の門がありそこから先は闇に覆われていて見ることが出来ない。蔓が神殿の壁に絡まっていてとても雰囲気が出ていた。

門を通り、神殿の中へ入っていく。中にはいると空気がガラリと変わるのを感じた。空気が張りつめており、肌がピリピリとする。

ドシン、と背後で何かが落ちる音が聞こえた。振り向くと門が閉じられている。どうやら逃げ道はなくなったようだ。気を引き締め、『血染め桜』を抜いて目の前の空間を見据える。

いきなりだった。

鼓膜が破れそうな程の音量の咆哮が神殿を揺らした。体が竦む。青色の炎が現れ、それが巨大な何かの形へ変化していく。熊だ。全身を青い毛皮で覆われた巨大な熊。ブラッディベアーとは比べ物にならないほどの大きさと迫力。俺はボスに完全に飲まれていた。足は震え、『血染め桜』を持っている手に力が入らない。

ああ……。

なんで俺はこんな簡単な事を忘れていたんだ。

ボスは何十人ものプレイヤーが束になってようやく勝てるようなレベルに設定してあるじゃないか。目の前のこいつは俺と同じぐらいのレベルのプレイヤーが集まって戦うのが前提になっている。ソコで勝てる訳が無いじゃないか。

巨大な熊はもう一度咆哮するとその目で俺を睨む。たった一人で来たのか、と嘲笑っているように見えた。

「ひつ、うわあああああああああ！！！！」

熊がゆつくりと近づいてくる。俺は悲鳴を上げて逃げ回る事しかできなかった。魂の欠片はあれから使っていない。だけどこいつには九回生き返っても勝てる気がしない。

鋭い爪が生えた長い手を振りかぶり、俺に向かって下ろす。それだけで凄まじい迫力だった。だがそこであっさりと喰らう程、生きるのを諦めた訳ではない。《見切り》で攻撃予測線を見て、《ステップ》でかわす。熊の手が壁にぶつかり神殿を大きく揺らす。あんなの喰らったら即死しちまうぞ……。

歯がさつきから震えてガチガチと音を立てている。恐らく現実な
ら小便を漏らしているに違いない。

熊がこちらを睨んだ。それだけで刃を首に突きつけられているような感覚に陥る。

[illegible][illegible]

《四連ジャンプ》で跳び上がり、熊の頭を狙う。勝てるとしたら急所を狙っての一撃死を狙うしかない。しかし《四段ジャンプ》では頭まで届かなかった。目標を変更して心臓を狙う。

俺は悲鳴を上げながら心臓に向かって突きを放つ。だけどそれが

当たる前に熊の手が俺をはじき飛ばした。体が後ろに向かって進んでいく感覚。神殿の壁に激突した。激痛が背中を襲う。意識が朦朧としてきた。辛うじてHPを確認するとほんの数ミリだけ残っていた。

クソ……。死にたくない。アイテムボックスから回復薬を取り出そうとしたが、視界がぼやけてどれがどれなのか分からない。それに出せたとしてもそれを手で取って口まで運ばなければならない。もう手を動かす力も残ってないからどっちにしろ無理だ……。

俺は死ぬのか？

こんな所で？　ひとりで？　何も出来ずに？

嫌だ。死にたくない。

まだやりたいことがあるんだ。

俺みたいな駄目人間を育ててくれた人達に謝りたい。現実世界に帰れたらちゃんと勉強して大学行って、就職してちゃんと金を稼ぎたい。その金で祖母に何か買ってあげたい。今は冷たい栞もきつと俺が真面目になれば前みたいに戻ってくれるはずだ。あいつと昔みたいにゲームして笑いあったりしたい。

熊が腕を振り上げるのが見える。

嫌だ。死にたくない。

俺は現実世界に帰るんだ。

称号【???】の発動条件が整いました。

称号【赤き紋章】を発動します。

稀少^{レア}スキル《残響》を会得しました。

スキル《四段ジャンプ》が変化しました。

稀少^{レア}スキル《^{スカイウォーク}空中歩行》を会得しました。

10（後書き）

今回の急展開はけしてさつさと次の章に移りたいとは思っている訳ではなくて、ダラダラとしていくくらいならいつそボスと戦っちゃえ！という感じです。

それから、固有スキルを稀少スキルにしました。MMOで固有はやっぱりいらしいので、稀少にしました。すいません。

レビューしてくださった方、ありがとうございます！

11（前書き）

今回も次回も短いです。
すいません。次の次ぐらいからまた増えます。すいません

全身が燃えるように熱い。何かと目を開けてみると、熊が俺に腕を振り下ろそうとしているのが見えた。そのまま熊は俺を叩き潰して――あれ？ 熊は確かに腕を振り下ろしてはいるが、その動きはとても遅い。まるで映画のワンシーンをスロー再生して映しているような感じだ。そこまで気付いてから俺は自分の体に違和感を覚えた。……痛くない。先程まで体を襲って痛みは完全に消えている。その変わりなのか、肌に赤い紋章のような物が浮かび上がっていた。ここには見覚えがある。そう、ブラッディベアーのだ。

ブラッディベアーはHPがレッドゾーンまで減ると全身に赤い紋章を浮かび上がらせ、力を増す。攻撃、スピード、防御力、それらが格段に上がるのだ。それに良く似たものが、今俺の肌にある。一体どういう事だ？

さっき、一瞬脳内に何かが浮かび上がった気がする。それが一体何だったのかは分からないが、“どうしたら良いか”と言うのが分かる。上手く説明出来ないが、この熊を倒すには何をどう使えばいいのか、それがさっき頭の中に浮かんできたのだ。このままならあつけなく殺される。だったら、その予感とでも言うべき物に頼ってみるのも悪くない。

そう思った瞬間、熊の動きが元に戻った。振り上げた腕が音を立てながら近づいてくる。俺は急いで立ち上がり、《ステップ》で横に跳んだ。体が軽い……。そして力が漲ってくるようだ。こんな状況だというのにとっても心地良い。

仕留めたと思っていた獲物に逃げられた熊はグルル唸ると、体をこちらに向けてまたゆっくり近づいてきた。やはりこいつの動きは

んで生き返って死んで生き返って死んで生き返って死んで生き返って死んで生き返って死んで生き返って！

ついに熊のHPが零になった。俺はもう八回死んでいる。それでも勝ったんだ。俺はこの熊に勝って生き残ったんだ！ よっしゃああああ！！

熊が絶叫し、そのまま後ろに倒れる。え……。うなじに刃を刺してぶら下がっていた俺は避けれるはずもなく、そのまま熊に押しつぶされた。

俺はまた死んだ。

レベル60になりました。

スキル《見切り改》を会得しました。

スキル《真空斬り》を会得しました。

スキル《間合い斬り》を会得しました。

スキル《オーバーレイ・スラッシュ》を会得しました。

称号【幸運】を入手しました。

魂の欠片を使用しますか？ Yes/No

12（前書き）

皆さんこんばんは、オンラインです。7時に投稿しようと思っていたのですが、ちよつと色々あつて出来ませんでした。すいません。

今回は運営側の話です。

太刀が貶された理由も説明してます。「ないわーwww」とか言わないで下さいね！
短くてすいません

宙に浮いた大量のスクリーンが暗い部屋を照らしていた。スクリーンの前には椅子と机が置いてあり、何十人もの人がスクリーンを見ながら手元のキーボードをカタカタと打っている。

スクリーンの一つに熊に押しつぶされる暁が映し出されていた。それを眺めていた男はククツと子供のように顔を崩し、笑みを浮かべる。手元のキーボードを打つ様子はない。男は三十代前半ぐらいの容姿をしている。

「おい浦辺」

隣に座っていた女が顔を顰めながらスクリーンに見入っていた男に声を掛ける。浦辺は面倒臭そうに女の方を向いた。

「スクリーンを見ているだけじゃなくてちゃんと仕事をしろ」

「分かってる。今はやることがないから見てるだけだ。朝倉こそキチンと仕事してろ」

浦辺は不機嫌そうにそう言うつと再びスクリーンを覗く。その様子が頭に来たのか、朝倉と呼ばれた女は浦辺の太い腕を掴んだ。そのままグイッと引っ張って引き寄せる。浦辺は「んだよ」と朝倉の手を振り払う。

「ちゃんと仕事をしろ。万が一の事を考える。分かっているのか？ “あの場”で不用意に太刀を貶すしバグを起こしてプレイヤーを隠しエリアに引きずり込むし、お前は何がしたいんだ？ お前がここを任されていなければ、拘束してボスモンスターの前に放り出している所だ」

浦辺はこいつ何を言ってるんだ？ といった顔をした後何かに納得したのか大きく頷いた。それからニヤリと厳つい顔を笑みの形にする。それを見た朝倉は顔を歪めた。

「この退屈な仕事の中に少くらい娯楽を混ぜたって罰は当たらないだろう？ 俺はな、昔から、みんなに仲間はずれにされていた主人公が無双する小説とか、弱いと言われていた武器は実は強かったみたいな小説が好きなんだ。そういう系の小説を良く読むし自分でも書いてた。だから武器の中でずば抜けた所が無い太刀を貶してやったのさ。それにあの場はあの人も見ていたんだろ？ 俺が台本に書かれていない事を言っても何のお咎めもなかったんだから良いじゃないか。」

「訳が分からん。滅茶苦茶だ……。餓鬼じゃあるまいし……。それなら攻略WIKIに太刀をハズレ武器だと書いたときの様に、プレイヤーのための掲示板で太刀は弱い弱いと書き込めば良かったじゃないか。……プレイヤーの大半は混乱して真に受けていたが違和感を感じた者も少なくないはずだ。何も言われなかったとしても、やって良いことと悪いことがある」

「分かってねえなあ。それじゃ即効性がないだろうが。俺が見たいのは仲間はずれにされて仕方なくソロに行った主人公が帰ってきてみんなを見返すって言うシチュエーションなんだよ！ 他の太刀使いはすぐ死んだり、引き籠もったり、何だかんだでパーティーに入れたりと思い通りにならんかったが、こいつは今のところ俺の求めたシチュエーションを突き進んでる。だから何か起きても俺が責任取るから口出しするな、朝倉彩花副管理人さんよ」

「そのためにその暁とか言うプレイヤーを……。……取り敢えず、あまりゲームのバランスを崩すような事はしないでくれ。浦辺健正
うらへんせい
管理人さん」

朝倉は頭痛を堪えるように頭を押さえた後、再び自分の前にあるスクリーンを見ながらキーボードを叩き始めた。

「へいへい」

浦辺は適当に返事を返し、スクリーンを見ることを再開した。四角いスクリーンの中に移る暁は緑色に輝く門のような物を潜り、《ブラッディフォレスト》から姿を消した。

「へえ……行き先はそこにしたのか」

浦辺は再び顔を笑みの形に崩した。

12（後書き）

このゲーム内にはプレイヤー用の掲示板があります。そこでこのブリードオブオンラインの略称を出そうと思っているのですが、何が良いかなかなか思い付きません。

ブレオンとかBOOとか考えてますがどうでしょう。BOOだとS AOみたいなのでどうかなあって感じですが、それにBOOだと読み方がボオとかボーとか何か棒みたいだし。

棒とサオ…ww

誤字脱字、矛盾点、感想など下されると嬉しいです。

【囚われの】ブレオン雑談スレ1012【俺達】

1 : この冒険者がすごい！ ID : 23553

ここはブレオンについての雑談スレです。またーりいきましょう。

334 : この冒険者がすごい！ ID : 83381

ここに来てからもう一年以上立ったな。なんかもうどうでも良くなってきた

335 : この冒険者がすごい！ ID : 54328

<<334

むしろ一生この中で住みたいレベル

336 : この冒険者がすごい！ ID : 78903

<<334

墓地に刻まれた名前が一万越えたらしい。大分死んだな

337 : この冒険者がすごい！ ID : 54328

<<336

街に引き籠もってる俺勝ち組www

338 : この冒険者がすごい！ ID : 95320

一年経ったけどまだ現実じゃ殆ど時間経ってないんだよね……

339 : この冒険者がすごい！ ID : 43002

つーかひつきー組って毎日何してるわけ？ゲームの中でもニートと
かやばいなw

3 4 0 : この冒険者がすごい！ ID : 5 4 3 2 8
< < 3 3 9

ヒント 発電

3 4 1 : この冒険者がすごい！ ID : 7 8 9 0 3
< < 3 4 0
w w w w w w w w

3 4 2 : この冒険者がすごい！ ID : 8 3 3 8 1
< < 3 4 0
ちょw w w w w w

3 4 3 : この冒険者がすごい！ ID : 4 3 3 0 2
< < 3 4 0

おまいは一体ナニをネタにナニをしてるんだw w w

3 4 4 : この冒険者がすごい！ ID : 7 8 9 0 3
< < 3 4 3
うまくねえよw w w w

3 4 5 : この冒険者がすごい！ ID : 5 4 3 2 8
流星たんに決まってるだろいわけせんな恥ずかしい

3 4 6 : この冒険者がすごい！ ID : 7 8 9 0 3
流星たんは俺の嫁

3 4 7 : この冒険者がすごい！ ID : 4 3 3 0 2

流星たんぺろぺろ

3 4 8 : この冒険者がすごい！ID : 4 6 9 0 7
そう言えば俺何回か墓地で流星たん見たことあるよ

3 4 9 : この冒険者がすごい！ID : 5 4 3 2 8
< < 3 4 8

k w s k

3 5 0 : この冒険者がすごい！ID : 7 8 9 0 3
< < 3 4 8

k w s k

3 5 0 : この冒険者がすごい！ID : 4 3 0 0 2
パンツ脱いだ

3 5 1 : この冒険者がすごい！ID : 3 2 1 2
パンツ食った

3 5 2 : この冒険者がすごい！ID : 0 0 5 3 1
パンツ被った

3 5 1 : この冒険者がすごい！ID : 5 4 3 2 8
パンツ消し飛んだ

3 5 2 : この冒険者がすごい！ID : 4 6 9 0 7
パンツ脱ぐような話じゃねえよw w w

俺が仲間の墓にお参りに行ったとき、流星たんが墓地の中をキョロ
キョロしながら歩いてるのを見ただけだよ

3 5 3 : この冒険者がすごい！ID : 8 3 3 8 1
< < 3 5 2

ああ、俺もそれっぽい見たことあるはwなんか探してるっぽかったけどどうしたんだろうな

3 5 4 : この冒険者がすごい！ID : 7 8 7 7
< < 3 5 2 - 3 5 3

おまえら羨ましすぎるは

3 5 5 : この冒険者がすごい！ID : 4 6 9 0 7
< < 3 5 4
w w w

話したりしてないから大して羨ましくないだろw
それより早くイベントで戦ってる姿見たいな

3 5 6 : この冒険者がすごい！ID : 5 4 3 2 8
イベントが待ち遠しいな。

今回は流星さんのギルドと《不滅龍》ウロボロスに入ってる奴らがかなり上位に食い込んでたな。

この日ばかりは俺も外に出るぜ

3 5 7 : この冒険者がすごい！ID : 9 5 8 0

ギルドに入っただけでも強い奴いるぞ。

俺とか

3 5 8 : この冒険者がすごい！ID : 7 8 9 0 3
< < 3 5 7

お前は知らんが確かにギルドに入っただけでも強奴いたな。《嵐
帝》とか《巨人殺し》ゴレムスレイヤーとか化け物だわ

359:この冒険者がすごい！
ID:95320
さて、今回はどうなる事やら

13 (後書き)

掲示板ネタです

第三攻略エリア《ゴレムマウンテン》。β版では第二攻略エリアまでしか開放されなかったので俺がここに来るのは初めてだ。ここは既にボスモンスターが倒されていて街が作られている。

街が作られると鍛冶スキルや料理スキルを覚えた生産系のプレイヤーが集まってきて店を開く。そしてレベルの低いプレイヤーが攻略されたことで情報が出回っている事で異常事態が発生しにくいエリアに経験値を稼ぎにやってくる。どうやら攻略組によって第十一攻略エリアまで開放されたらしいが、この街にも結構な数のプレイヤーがいる。

何故俺がこの街に来たかというと、そこまで多くのプレイヤーが居ないだろうと思ったからだ。太刀使いつて事で注目されるだろうし、体臭がやばいことになっているので人の近くに行きたくない。まあ予想は見事に外れて結構な数のプレイヤーがいるんだけどね。よく考えたら死ぬ危険性があるのに高レベルなモンスターが出るエリアなんかにそうそう行かないよね。俺ならエリアの適正レベルを10以上越えないと行かないし。

そして今、俺は宿にいる。あの森では金を手に入れることが出来なかったためかなり貧乏だが、最初から所持している金が少しだけ残っていたためそれを使い果たして何とか一泊出来る。

部屋はかなり狭く、小さなベットだけでもう殆ど足場がない。トイレとシャワーが入り口のすぐ側にあるドアの中にある。何というかRPGゲームに出てきそうな木で出来た宿だというのに、トイレとシャワーで雰囲気台無しになっている。なんでここだけこんなに現代的なんだよ。ありがたいんだけどさ……。

身につけていた初期装備の防具を脱いで全裸になり、シャワーを

浴びる。長期間体を洗わなくても髪の毛が油でベトベトになるとか垢が沢山出るとかそう言う外見的な変化は起きないけど、何故か体臭だけきつくなっていく。一年ぶりのシャワーを浴びて感動しつつ、丁寧に全身を洗う。

「ふう……。さっぱり」

体臭が完全に無くなった所でシャワーを止め、外に出る。水に濡れてもすぐに乾くのでタオルとかで拭く必要はない。俺は防具の下に着ていたパンツとシャツだけ着て、そのままベットに飛び込んだ。堅いベットだが一年岩の上で寝ていた俺にとってはまさに天国の寝心地。むしろ気持ちよすぎて眠りにくいぐらいだ。

仰向けになって天井を眺めながら、俺はこれからの事を考える。せつかくあの森から生きて出られたんだし、もうモンスターとは戦わずに宿に引き籠もろうか……。持っているアイテムを売れば自分の生活費はどうにかなるし……。だけどそれは嫌だな。あの森みたいなムリゲーは嫌だけど、今なら俺のレベルもだいぶ上がったいるし戦いたい。そして俺を見捨てたガロン達を見返してやりたい。

「栞……」

見捨てた、で思い出した。あいつは今どうしているだろうか。あいつも結構なゲーマーだし、そう簡単に死ぬような事はない……。と思いたい。俺と違ってパーティー組んでたから死んでいる確率は低いと思うんだけど……。フレンド登録が出来ればあいつが今生きているかどうか確かめられるんだが。ギルドに入ってくれていれば安心出来る。

ギルドというのは簡単に言うと大規模パーティーのような物だ。一人のプレイヤーがギルドを作れることを宣言し、三日以内に三十人以上のプレイヤーが加入希望をすれば作られる。β版ではギルドは

作れなかったからネットで公開されていた事しか知らないんだが、ギルドの仲間にはモンスターを倒した時に貰える経験値を何割か分けてあげることが出来るらしい。強いプレイヤーは弱いプレイヤーに経験値を分けてやり、安全にレベルを上げていくことが出来る。他にも色々特典があるみたいだけど俺は知らない。

そういえば、このゲームには掲示板機能があったな。仲間募集したら匿名のプレイヤー達に馬鹿にされた覚えがある。あとで見てもうか。

もう寝よう。

良い大学に入って良い仕事に就いて栞達に楽をさせてやりたかった。だから俺はレベルの高い大学を受験した。毎日寝る暇も惜しんで勉強し高校生活はほとんど勉強の思い出しかない。あれだけ勉強したんだから、受かるだろうと思っていた。だけど現実は残酷だ。

俺はあと一步の所で受験に失敗した。この大学以外に入るつもりは無かったから俺は浪人することになる。落ちたとき、栞は泣きながら励ましてくれた。

『っ……兄さん……お疲れ様でした……。まだ……終わっちゃった訳じゃないし……大丈夫ですよ』

いろんな人に励ませれたが俺はもう完全にやる気を失っていた。何で俺が落ちなきゃいけないんだよ。大好きなゲームも我慢して毎日毎日毎日毎日あんなに必死に勉強したじゃねえか。なのに何でだよ。ふざけんじゃねえよ。

俺は将来のためにバイトで稼いでいた金と予備校に行くための金

で《ドリーム》を買った。今までは妹と一緒に溜めた金で買った《ドリーム》を使っていたが、栞はゲーム好きだから俺が一人で使うわけにはいかない。だから俺は自分専用の《ドリーム》を買い、一日中部屋に閉じこもってゲーム続けた。

最初の方は栞も息抜きは必要だと何も言わなかったが、何ヶ月も閉じこもっていると愛想を尽かされてしまった。何回も頑張るように説得しに来た栞の言葉は俺の胸には響かなかった。

『兄さん……いつまでゲームをしているんですか……頑張ってください……。兄さんならきつと良い大学いけるはずです！』

『兄さん。お願いですから部屋の外に出てきてください。何か悩み事があるなら聞きます。大学に落ちたのは辛いと思いますが、いつまでもそうしていたらダメです。次にいかしてください』

『兄さん、久しぶりに一緒にゲームしませんか？……お願いですから部屋から出てきてください。どうしてしまったんですか？』

『……あなたは嘘つきなのですか？昔言った約束をもう忘れてしまったんですか？お父さんとお母さんが死んでしまったとき、兄さんが言ってくれた言葉に私がどんなに助けられたか……。お願いですから……出てきてください……。暁お兄ちゃん』

何を言われても部屋から出るつもりはなかった。祖母の作る料理を食べ、一日中ゲームをする。栞との約束を忘れたわけではなかったけど、もうどうでも良かった。こんな俺に栞が守れる訳がないじゃないか。だからお前は頑張って生きてくれ。俺なんかに頼らずにお前は生きていけるよ。栞は十分強い。それに美人だから男がほっとかないだろう。彼氏でも作って幸せに生きてくれ。俺はゲームをしているから。お前が良い会社に就職してくれ。それから出来れば俺にもゲームを買うための金を分けてくれ。いつまでも同じゲームば

つかりじゃ飽きるからな。頼んだぜ、栞。

俺はゲームし続けた。

[illegible]

ゲームをし続けた。

長い夢を見ていた気がする。思い出せないけど夢の中には梨が出てきて、泣いていた。俺のせいで。枕がぬれていた。どうやら俺も泣いていたみたいだ。てめえのせいで梨が泣いたんだぞ。俺が泣く権利なんてねえだろうが……クソが。

栞に会いたい。そして謝りたい。許して貰えるなんて思わないけど、それでも謝りたい。

栞は今、どうしているだろうか。

とりあえず俺は外に出る事にした。いつまでも初期装備のままでは居られないし、もっているアイテムで何か防具を作ろう。金は掛かるだろうがまあ大丈夫だろう。それからこの攻略エリアに行つて自分の強さを確かめる。

それから、栞を探しに行こう。

俺は防具と『血染め桜』を装備し、自室の扉を開けて外に出た。

15（前書き）

三話更新頑張るぞー

外に出ると他のプレイヤーの視線が痛かった。宿に行くときは全速力で走っていたからそれほど気にならなかったが、今は鍛冶屋を探してゆっくりと歩いているからそうもいかない。「おい、あいつ初期装備でしかも太刀だぞ」「まだ太刀使い居たのか？ もう全員違う武器に鞍替えしたって聞いたぞ」「俺太刀使ってる奴初めて見た」など、プレイヤー達は俺を見ながら喋っている。クソ、おかしいだろ。何でゲームバランスを保つための運営があんな事を言うんだ？ それに他のプレイヤーも真に受けすぎだ。なんであんな胡散臭い奴の言葉を信じられるんだよ。

プレイヤー達を無視しながら、街の中を歩いて鍛冶屋を探す。NPCが開いている鍛冶屋を見つけたが、スルーする。NPCの出している生産系の店よりもプレイヤーがやっている店の方が遙かに生産の腕が上なのだ。きっとこの街にもプレイヤーの開く鍛冶屋はあるはずだ。

しばらく探しているとプレイヤーがやっていると思われる鍛冶屋を発見した。NPCの店は全部同じ形をしていて特徴がない。今目の前にある鍛冶屋はさっき見かけたNPCの店よりも大分大きいから目立っている。俺はこの鍛冶屋に入ってみることにした。

ささむけた木の扉を開いて中に入ると「らっしゃーい」と間の抜けた声が聞こえてきた。声からしてこの店を開いているのは女性のようなのだ。

店の中には幾つかの棚が並べられており、それに防具や武器が所狭しと置かれている。

カウンターに立っているのは茶髪の女性だった。短く切られた髪がどこか男っぽさを感じさせる。顔はなかなか整っていて、大きな二重まぶたの目が特徴的だ。

「すみません。モンスターの素材から防具一式を作って欲しいんですけど」

怠そうに俺の方を見た女性の目が見開かれる。どうやら太刀装備が珍しいみたいだ。俺の全身を舐めるように見た後、その女性は口を開いた。

「あーと。君なんで太刀？　　というか何で初期装備のまま？」

女性の口から出てきたのは疑問だった。あんまり聞いて欲しくないんだけどな。確かに太刀装備は珍しいし初期装備なんてもう居ないだろう。つうか本当によく初期装備であの森から出ることが出来たな……。奇跡だろあれ。

「まあ色々あつてちょっと」

適当に誤魔化しておく。誤魔化せてないけどな。

女性は怪訝そうな顔をしたが取り敢えず仕事モードに入っただけ。どんな素材を持っているか聞いてきた。

うーん。あれからかなりの量の素材手に入れたからな。取り敢えず、あの中で一番強そうだったあの青い熊（名前は巨青熊グルヴァジオ）の素材を出してみることにした。

俺はカウンターに巨青熊の剛毛皮、巨青熊の鋭爪、巨青熊の剛骨、巨青熊の尻尾、巨青熊の牙を置く。女性は毛皮を手に取り顔に近づけて観察する。生産系のスキルには《鑑定眼》という物があり、見ただけでアイテムのレア度とか効果が分かるようになるらしい。この女性も《観察眼》を持ってるのか？

「え、嘘、何だこれ!？」

女性はカウンターに置かれたグルヴァジオの素材を見て驚きの声を漏らした。何だっと言うんだよ。急に大声出すな。

女性は子供みたいに目をキラキラ光らせて、素材を手にとって見ている。何が見えているのか分からない俺は黙ってその様子を見ているしかない。一通り見終わった女性はふう、と息を吐いてこちらを見てきた。

「君、なんでこんなレア素材持つてるわけ？ 何これあり得ない。こんなレベルの素材見たことない。なにこれ？ どつかのボスモンスターなの？ でもこんな名前のモンスター知らないし……どこで手に入れたの？」

女性が興味津々な顔で聞いてくる。どこで……って言われてもなあ。バグのせいで《ブラッディフォレスト》に行ってしまったなんて言う訳にはいかないし、どうしようか。うーん。

「あんま詮索しないで貰えますか？ 他の鍛冶屋に行っても俺は良いんですから」

取り敢えず、どこかの小説で読んだような台詞を吐いてみる。これでもまだ聞いてくるなら本気で他の所に行こう。注目されたくないから好ましくは無いんだけどね。

「あーごめんごめん。分かったよ。これで防具作ってみる。あー後武器も作れるけどどうする？」

「じゃあ太刀をお願いします」

この言葉に女性は何か言おうとしたが寸前で止めたようだ。良か

った。他の鍛冶屋を探しに行くのは面倒だからな。

「……分かった。完成するまで半日ぐらいかかるよ。出来たら呼ぶからフレンド登録してくれる？」

頭の中でフレンド登録、と念じると手元にカードのようなものが現れた。女性も同じ物を出し、お互いにカードを交換した。これでフレンド登録は完了だ。好きなときにチャットをとばして確認することが出来る。

女性はレンシアという名前だ。

「じゃあ暁君、お代は防具が完成してからで良いよ」

レンシアさんの言葉に頷き、俺は鍛冶屋を後にした。次に向かうのはNPCが開いている何でも屋だ。何でも屋と言ってもそこまでの種類のアイテムが置いてある訳じゃないんだけどな。ここに行くのは手に入れたアイテムを売ると回復薬などを揃えるためだ。レンシアさんの作業が終わるのは半日後。まだ昼にもなっていないし、この後俺は《ゴーレムマウンテン》の攻略エリアに行くつもりだ。防具と武器が来るのを待った方が良いと思うが、正直もう我慢できない。俺の一年がどれぐらい通用するか早く試したい。あの森に居たときはこんな事は思わなかったけど、やっぱ外に出てみるとこんなモンだな。

「いらっしやいませ」

何でも屋は露店だ。店の前に立つとNPCのどこか無機質な声が俺を出迎えた。アイテムボックスから不要なアイテムを選択してNPCに渡す。

赤熊の毛皮×10、赤熊の爪×10、紅殻蠍の剛殻×10、紅殻蠍の鋏×10、紅殻蠍の毒尾×10、痺角兎の毛皮×10、痺角兎の角×10、痺角兎の尻尾×10、巨殺蜂の羽×10、巨殺蜂の針×10など、あの森で手に入れた素材アイテムを全て売ることにした。もう要らないしな。同じアイテムは十個までしか持てないから、森でゲットしたアイテムは全部合わせるともの凄い量になったろうに勿体ない。

「126万2926テイルになります」
「え」

NPCの口から飛び出た金額に思わず聞き返してしまう。今更だがこの世界の金の単位はテイルだ。高い安いの基準は円と殆ど変わらないと思う。だから100万テイルはかなりの高額だ。いくら何でも高すぎるだろ……。まあいいや、お金を沢山持っていて損はないしな。大金を持っているとPKされる恐れがあるけど、まあ持っていることを知らなければ問題ないだろう。

NPCから金を受け取った後、回復薬とスタミナドリンクなどの回復系のアイテムと、エリアから街まで瞬間移動できるワープロープを買い、露点を後にした。因みにワープロープは他のアイテムと違い一個しか所持することが出来ない。それにボスとの戦闘が始まると使用できなくなる。まあこれは飽くまで保険だ。今の俺なら楽勝な筈だ。

向かうのは当然、《ゴレムマウンテン》。

さあ皆さん、俺の華麗なる太刀無双をとくにご覧あれ。

15 (後書き)

ちよつと台詞がメタっぽいですね

16（前書き）

誕生日なので三話更新します。
書く溜めがなくなりました。

泥で出来た人型のモンスターが襲いかかってきた。名前はマッドゴーレム。泥で出来ているにもかかわらずその動きは機敏だ。歩いた部分に泥の跡を付けながら拳を振り上げて近づいてくる。

この《ゴーレムマウンテン》は文字通りゴーレムの山だ。出てくるモンスターは全部ゴーレム系。山の頂上にボスが居るらしい。このマッドゴーレムがこの山で初めてあったモンスターだ。

ゴツゴツした足場に躓かないように気を付けながら、マッドゴーレムの動きをよく見る。グルヴァジオを倒したときに会得したスキル《見切り改》の性能を確かめる良い機会だ。

泥で出来た目を大きく開いてマッドゴーレムが殴りかかってきた。迫ってくる拳が見える。《見切り》の様に赤い予測線は出ない。その代わり、どこに攻撃が来るのか相手の気配で“分かる”ようになったようだ。これは良いスキルを手に入れた。いちいち予測線を見るのは疲れるしな。

マッドゴーレムの攻撃を軽く体を横に反らただけでかわし、隙だらけになったところで頭を切り落とす。ゴーレム系のモンスターは全体的に体が堅いと聞いたが、なんだこいつ。豆腐みたいな柔らかさだな。急所を攻撃されて一撃死したマッドゴーレムが消えていく様子を見ながら、俺は余裕の笑みを浮かべた。

山を登って行くに連れて出てくるモンスターの数が増えてきた。

マッドゴーレムが同時に三体も登場する。周りを見てみると数の増えてきたマッドゴーレムに苦戦しているプレイヤーが見えた。こいつらに苦戦するってここにいるプレイヤーは一体何レベルなんだ？プレイヤー達が一生懸命戦っている様子を見ながら、マッドゴーレム達の攻撃をかわして斬り付ける。急所を狙わずに適当に斬っただけなのに一発で死んでしまった。まさかスキルを使わなくても余

裕とはな。

「おい、あれ太刀じゃね？　しかも初期装備だし」「太刀とか嘘だろ？　今マッドゴーレム瞬殺してなかったか？」

周りのプレイヤーが俺に注目し始めた。鬱陶しいな。もつと上に行こう。

岩で出来たロックゴーレムと鉄で出来たアイアンゴーレムの二体同時攻撃を《残響》でかわす。

《残響》は攻撃が当たると敵の死角に瞬間移動できるスキルだ。ダメージは受けない。稀少スキルと言うだけあってかなり便利だ。『攻撃をかわされた相手が自分が斬られると自覚する時には既に絶命している。最後に聞くのは自分の斬られた音の残響……』というよく分からない事がスキルの説明文に書かれていた。

ゴーレムの拳が当たった俺の体がスウッと薄くなって消えていく。二体の背後に移動した俺は新しいスキル《真空斬り》で攻撃する。何もない空間を太刀の刃で切り裂く。《真空斬り》は離れた相手にも攻撃することが出来るスキルだ。透明な刃が二体のゴーレムの胴体を通り二つに切り裂き、HPを零にする。本来ならモンスターを一撃で倒すような威力を持ったスキルではないが、俺のレベルが高いお陰でゴーレムを通り二つにすることが出来たようだ。

それから行く手を阻むモンスターを軽く全滅させ、休憩地がある中腹までたどり着いた。プレイヤー達はここで体力やスタミナを回復していくようだ。ゴーレムの攻撃は全てかわし、たまに新スキルを試し打ちしてただけの俺は無傷と言っても良い。休憩する意味はないな。先へ行こう。俺が休憩地をスルーしそのまま頂上を目指

そうと歩き出すと、後ろから声を掛けられた。

「よう兄ちゃん。今時太刀使ってるとか珍しいな」

「休憩しなくて大丈夫なのかぁ？」

振り返ると髪を金髪にした何ともチャラそうな二人組が立っていた。何かの鱗を素材とした防具を使用し、二人とも大剣を背負っている。ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべながら、男の一人が俺の背後に回り込んで背中の中太刀に触れる。

「へえーなかなかレベルが高そうな太刀だな。初期装備の君には勿体ないんじゃない？」

「っーか何で太刀使ってる訳？ 運営が言ってたけどそれ超雑魚いらしいじゃん。そんなん使うとか頭大丈夫か？」

喋り方といい態度といいこいつら腹立つな。絶対こいつら現実で仕事も就かずに遊び回ってるようなタイプだわ。屑め。

馴れ馴れしく太刀に触っていた手を払う。『血染め桜』が汚れるからベタベタ触るな。

「おつやるねえ。何君？ 俺らに喧嘩売ってる？」

「俺とタイマン張るか？ おい」

こういう奴学校に居たな。何かいつつもトイレに集まって騒いで格下と思われる相手を馬鹿にする。そして反抗されると調子の手でんじゃねえよとかタイマンだのどうこう言って暴力に訴える。俺不良とかそう言う人種大嫌いだからこういうのを見ると腹立つわ。

周りのプレイヤーも俺達は何やらもめているのに気付いたのか注目し始めている。「あれ太刀じゃね」とか聞こえるけど無視しよう。いちいち反応してたら疲れるからな。お前ら言っとくけど太刀強い

からな。調子乗ってるとぶっ飛ばすぞ。タイマン張ってやろうか？
ああん？

「うざ」

睨み付けて小声で呟く。二人は「はあ？」と半笑いを浮かべながら俺の肩を掴んできた。

「うぜえじゃねえよ。調子のとてんじゃねえぞ」

「太刀使いの癖にいきがってんじゃねえぞ」

不良って言うのは何でそんなに喋るとき顔近づけて来るかな。息が掛かって気持ち悪いんだけど。

下手したら決闘とか申し込まれて面倒な事になりそうだから早めにここから抜け出した方が良さそうだ。そう言えば、あの森で格下相手に丁度良いスキル会得してるんだった。

《侍の気迫》。

スタミナを消費しないスキルだ。自分より格下の相手のステータスを下げることが出来る。その他にも相手を迫力で脅す事も出来るようになっている。これは持っているだけで格下相手に発動するスキルではない。相手を定めて発動することで効果を発揮する。

「うおっ」

「おわっ」

発動しながら睨み付けると、二人は体をビクッと震わせて後ろに下がった。今まで浮かべていた笑みは引きつり、唇がピクピク痙攣している。こういう奴らは格上にはヘラヘラするからもう絡まれる

事はないだろう。固まっている二人を押しつけて頂上を目指して再び歩き始める。後ろで「今の威圧系のスキルじゃね?」「あの二人よりレベル高いって事か?」とか聞こえてきたけど無視無視。

16（後書き）

無双って書くの難しいですね……。
次も無双します。

17 (前書き)

更新三回目。

頂上に近づいてくると出てくるモンスターの数が格段に増えた。レベルもそこそ高くなっている。それでも俺一人では対応出来る程度だけだな。もう少し先の攻略エリアに行くべきだったかも知れないな。ここじゃモンスターが弱すぎて自分の強さがどれくらいなのかよく分からない。現在第一二攻略エリアにいるという攻略組がどれ程の強さなのか知りたいな。宿に帰ってから調べるつもりだけど、自分で戦って確かめてみたい。この世界はレベルがただ高いだけじゃ生き残っていけないし、本当の実力をこの目で確かめたい。

しばらく登っていると分かれ道が見えてきた。恐らく片方がボスへの道だろう。もう片方は何だろう。やっぱこの山について調べてくるべきだったな。楽勝だと余裕でいたけどこういうところで面倒なことになる。しょうがない、右へ行こう。

右の道を選んでしばらく進んでいくと地面に草が生えているのが見えてきた。この山は岩ばかりで草とか生えてなかったのになんでここだけあるんだ。進んでいくと草の量が増えてきた。木も何本か生えている。この山はどうなってるんだ？

周りを観察していると少し離れたところで何かが落下するような音が聞こえてきた。それが何回も連続して地響きを起す。何か起きたみたいだ。取り敢えず音の聞こえた方へ行ってみるか。足下に絡みつく草を強引に離しながら先へ走る。もしかしたら、この先にいるプレイヤーが危ない。

エリアの中で気を付けなければならないのはモンスターだけではない。PKをしてくるプレイヤーと、罾だ。エリア内には幾つかの罾が仕掛けられている。プレイヤーを状態異常にする罾や大量のモンスターが一斉に襲いかかってくるモンスターハウスなどがある。

今の音は恐らくモンスターが空から降ってきた音だと思う。エリアの適正レベルに達していてもモンスターハウスに掛ければ死んでしまう事がある。モンスターハウスではワイプロープが使えないため、モンスターを倒すほかに生き延びる方法はない。

進んでいくとモンスターが大量にいるのが見えた。ゴーレム系のモンスターが何かを囲んで攻撃を仕掛けている。今まで見なかった木で出来たウッドゴーレムなんてのがゴーレムの中に混ざっていた。どうやら木が生えていたのはあのゴーレムがいたからか。このまま見捨てて元の道に行こうか考えたが、プレイヤーに恩を売っておいで損はないし、このモンスターなら何体来ても大丈夫だろうと思いい助けることにした。太刀っただけで白い目で見られるのは嫌だし、太刀に助けられただと……と驚かせてやれるかも知れない。何人のプレイヤーがあそこにいるか分からないが、取り敢えず助けてやろう。急いで駆け寄り、こちらに背を向けていたアイアンゴーレムを斬り付けて倒す。後ろからやってきた俺に気付いたのか、何体かゴーレムがこちらを振り向いた。

「加勢するぞ！ 大丈夫か！」

モンスターハウスの中心にいるプレイヤー達に声を掛ける。中から金属音が聞こえてくるからまだ全滅はしていないようだ。

「ありがとうございます！ このままだとちょっとやばいです」

中から若い男の声が聞こえてきた。まだしばらくは耐えられそうだな。

ギシギシと音を立てながら突進してきたウッドゴーレムをそのまま真つ二つに切り裂き、《ライト・スクエア》で近寄ってきたゴーレムを一掃する。仲間がやられた事でゴーレムが中のプレイヤーよ

りも俺が危険と判断したようだ。大量のゴーレムが足音を響かせながら走ってくる。おお……結構迫力あるな……。ブラッディベアーには遠く及ばないけど。

「《真空斬り》！」

先頭を走っていたゴーレム達を切断する。仲間の死体に足を取られてバランスを崩すゴーレム達に近づいていき、スキルを使わずに軽く倒していく。次第にゴーレムの数も減っていき、襲われていたプレイヤーの姿が見えた。驚いたことにモンスターハウスの中心にいたのは若い男女だ。若いと言うのは何かおかしいかもしれない。二人とも中学生ぐらいに見える。よく二人だけでここまで来たな……。男は斧を、女の方は槍を使っている。

「《スタブ・トライアングル》」

女が三連続で攻撃するトライアングルのスキルを発動して近くにいるゴーレムを牽制し、男が《フルスイング》で怯んだゴーレムを吹き飛ばす。なかなか良いコンビだな。二人とも息がピッタリと合っていてなかなか隙がない。それでも数には負けるようで、後ろから近づいてきているゴーレムに気付いていない。俺は道を塞ぐゴーレムを斬って進む。《空中歩行》スカイウォークで二人を飛び越え、攻撃しようとしているゴーレムを斬り倒す。二人は一瞬で後ろに移動した俺に目を丸くしながらも、近づいてきたゴーレムを確実に倒していった。

五分ほど経つてようやくゴーレムを全て倒すことが出来た。俺はレベルアップしなかったけど二人は何レベルか上がっていたようだ。二人は回復薬とスタミナドリンクをアイテムボックスから取り出し、嚥下して体力とスタミナを回復させる。その後俺の方に近づいてきて頭を下げてきた。近くで見ると二人ともよく似た顔つきをしてるな。もしかしたら兄妹かもしれない。

「危ない所を助けて頂きありがとうございます。僕達二人だったら多分死んでました」

「ありがとうございます」

人に頭を下げられるなんて経験したこと無いから反応に困ってしまった。小説のワンシーンみたいだ。なんか照れくさい。というか予想していた反応と違うぞ……。太刀に助けられただと……じゃないなんて。

「いえ……助け合うのは当然のことですから」

ちょっと臭すぎる返事してしまった。引かれるかな、と思って反応を待っていると二人は俺を見て目を輝かせ始めた。ええ……なんなんだ。二人はお互いに頷き会うつと、男がどこか緊張気味に口を開いた。

「あのっ、もし良かったら僕達とパーティーを組んでくれませんか！？」

17（後書き）

連続技の説明。

トライアングルで三連続、スクエアで四連続、ペンタゴンで五連続、それ以上はさまざまな名前が付いています。

18（前書き）

説明回です。ちょっと強引かもしれない

突然のお願いに思わず呆気にとられてしまった。まさかパーティーを組んでくれなんて言われるとは全く予想していなかったわ。というか俺は太刀なのにパーティー組みたいのか？ 太刀つてだけでパーティーに入れて貰えなかったのは今でも良く覚えている。あいつら絶対に許さない。絶対にだ。

俺が何て返そうか迷っている間、二人は期待を込めた視線を送ってくる。何というか、凄く断りにくい。……。俺の無言を否定だと思ったのか、女の方が慌てて言葉を付け加えてきた。

「ず、ずっとパーティーを組んでくれって訳じゃなくて、このボスと一緒に倒して欲しいの！ その、ゴレムの時強かったし、助けてくれて、優しいそうだから、お願いします！ ボス一緒に倒してくれたら、後で料理御馳走しますから！ わ、私これでも【料理人見習い】の称号持つてるんですよ！」

男の方が女の言葉に頷く。つまりボスを倒すまでで良いからパーティーを組んで欲しいって事か。ふむ……。知らない相手とパーティーを組んで油断したところを後ろからブスリ、なんて事もあり得るし慎重に考えなければならぬ。と言ってもこの二人がそんな事をするとは考えにくいし、仮に襲ってきたとしても負ける気がしない。うん……。OKしてみようか……。この二人はいつたいどれくらい現在の状況を把握しているのだろうか。もしかしたら色々聞き出せるかも知れない。それに料理を御馳走して貰えるのは結構魅力的だ。【料理人見習い】って事はある程度料理してるみたいだし、ずっと木の実や生肉を食べてきたから久しぶりに温かい料理が食べたい。まあ、俺もこの後ボスに挑むしそのついでだと思えばいい。利用価値はありそうだしな。

「分かった。パーティーを組んでくれ。料理楽しみにしているよ」

俺の返答を聞いた二人は飛び跳ねて喜んだ。いったいなんでそこまでボスを倒したいんだ？ 嬉しそうに笑う二人を見ながら、俺は首を傾げた。

「ほ、本当ですか！　じゃあ、パーティー登録をしましょう」

二人がフレンド登録のためのカードを取り出した。パーティーを組むにはまずフレンド登録する必要がある。俺もカードを取り出して二人に渡し、カードを受け取った。男の方はリュウ、女の方はリンという名前だ。

「じゃ、えつと暁さん、リーダーになってください」

パーティーを作る時に親となった者がリーダーになる。二人にパーティー申請を送り、受理されるのを待つ。しばらくするとポーンと言う音が響き、三人はパーティーとなった。

リュウがお願いします、と握手を求めてきた。俺はそれに応じ握り返す。この世界に来てずっと一人だったからパーティーを組めてなんか感動した。……というのは嘘だが、まあ悪くはない気分だ。役に立ってくれよ、ガキ共。

取り敢えず、一度中腹に戻ることにした。来た道に戻りながら俺は気になっていた事を二人に尋ねる。

「二人はどういう関係なんだ？」

些かストレート過ぎたかも知れない。まあ何て聞いたらいいか思いつかないし仕方ないな。二人は顔を見合った後、リュウが話し

始めた。

「えっと、リンは僕の妹です。双子なんですけど、僕の方が早く生まれて……。僕達は中二でした」

やっぱり兄妹だったか。二人とも中学生なのによく一年も生き延びてこられたな。街やエリアで見かけるのは大体が高校生以上の人で、中学生ぐらいの年齢の子は見かけていない。弱い者から死んでいくこの世界では小さな子供では生き延びていけないからな。死んだか引き籠もっているんだろう。

「二人だけ今まで生活していたのか？」

リュウとリンはその質問に目を伏せた。何かまずい事を聞いてしまったか？

「……この世界に閉じこめられてから僕とリンは宿に閉じこもっていました。けどしばらくして持っていた金もなくなり、エリアで戦わないといけなくなつた……。そんなとき、親切なお兄さんが僕達のような子供を集めてギルドを作りました。経験値を分けて貰いながら安全な狩りをして、僕達もある程度戦えるようになりました……。だけど、ある日第二攻略エリアの《ダイナソージャングル》で、PKプレイヤーの集団に襲われて、仲間は殆ど殺されてしまいました……」

あー、地雷踏んじやつたな。そんな事があつたのか。やっぱりこういう状況でもPKに走る奴はいるんだな。俺も気を付けなければ。それにしても、そんな目に遭つたのになんでまだエリアにいるんだ？ 俺の疑問を察したのか、今度はリンが口を開いた。

「レベルの低い安全なエリアの街は引き籠もった人で溢れているから、宿が使えなくて私たちはレベルの高いエリアに行かなくちゃならないの。レベルの高いエリアだと宿や料理が高いし、金を稼がなきゃいけない……。二人だけではこの世界では生きていけないけど、私たちみたいな子供は足手纏いになるって誰もパーティーに入れてくれないの……。私が料理作るにしても材料がいるし……。だからここでレベルを上げて、ボスモンスターから取れる素材を使った防具を手に入れることが出来れば、みんなに認めて貰えるかなって思っ
つて……」

「ボスの防具？」

リュウが答えた。

「このボスから作れる防具は高性能なので……。丈夫だし、『生命力』のスキルが付いているんですよ。この防具は攻略組の人達がしばらく使っていたから、何というか、持っていると認められる？　というか……」

防具や武器の中には装備するだけでスキルが使えるようになる物がある。このボスの素材は防具にスキルを付加するみたいだ。《生命力》とはどんな攻撃を受けてもHPが1残るというプレイヤー達から重宝されているスキル。俺も早く手に入りたいな。

「それで適正レベルも越えたとしボスに挑もうと思ったんですが、道を間違えてしまってここに来て……。それでモンスターハウスに……。だからもう一度掲示板で確認した方が良いつて言っただのに。リュウの馬鹿！　曉さんがいなかったら私たち死んだのよ！」

「う、ごめん……」

適正レベル越えたってお前達二人じゃボスには勝てないと思うぞ

……。むしろ道を間違えて幸運だったなお前ら。それにしても兄であるリュウより妹のリンの方がしっかりしてる。全く、妹を守つてやれない兄なんて兄失格だぞ。

「そう言えば、二人のレベルって今どれくらいなの？」

「えつと、僕は23でリンは22です。ここの適正レベルは16だから大丈夫だと思ってたんですけど……」

あー。第三攻略エリアだからそこまで高くないと思ってたけど俺のレベルとかなりの差があるな……。攻略組はつい最近第十一攻略エリアをクリアしたばかりなんだよな。そこにいる奴っていったい何レベルなんだ？

「曉さんは何レベルなんですか？ すっごい強かったですけど……」
「60だ」

「「はあ!？」」

二人が同時に聞き返してきた。何だよその顔は。二人して体をブルブル震わせるな。そして何か憧れの人を見るようなキラキラした目で俺を見るんじゃない。

「えつ、えつ、ろく、60レベルですか!？」

「ちよ、ええ!？ 嘘でしょ!？」

リュウとリンがもの凄い反応をしながら急接近してくる。嘘じゃないよ。何だよその反応怖いってば。フレンド登録したんだからレベルぐらい確かめられるでしょうが。

「も、もしかして曉さんって攻略組の人ですか!？ 確か第十一攻略エリアは60以上じゃないと通用しないんですよ! と言うこ

とは第十一攻略エリアに行ったことあるんですか！？ モンスターが格段に強くなったって聞きますけど、どうなんですか！？ 何で初期装備なんですか！？ というか何で太刀なんですか！？」

「もしかして《不滅龍》フロボロスとか《照らす光》パーフェクトウォールに入ってますか！？ 《流星》さんとか《震源地》さんとか《移動城壁》さんとか《嵐帝》さんとか有名な人と会ったことありますか！？ なんで初期装備なんですか！？ というか何で太刀なんですか！？」

二人がもの凄い剣幕で質問攻めにしてきた。全く何を言っているのか分からないぞ……。一人ずつ喋ってくれ。

「俺は攻略組じゃない。それとそのうるなんちゃらとかなんちゃらの光なんていうギルドには入ってないし、その人達にも会ったことはない。俺には複雑な事情があるから、その辺はあまり聞かないで欲しい。それと、出来れば攻略組について詳しく教えて欲しいんだが……」

二人は俺の言葉に落胆して肩を落とした。そんなガツカリする事無いだろ……。

「分かりました……。そこまで詳しいことは知らないんですけどね……」

……やはりこの二人を助けて良かった。聞きたい情報をピンポイントで入手することが出来たぜ。恐らく攻略組についてはこの世界で常識になっている。常識をわざわざ掲示板で探すのは面倒だからな。

二人の話を纏めてみるか。今、攻略組を除いた殆どのプレイヤーのレベルは10から40程度。それ以上はそこまで多くないらしい。

大体のプレイヤーは安全なエリアでレベルで少しずつレベルを上げたり、生産職についているようだ。

命知らずな攻略組がクリアした第十一攻略エリアの適正レベルは65。今までのエリアよりもモンスターが格段に強いらしい。ボスモンスターは《不滅龍》^{フロボロス}と《照らす光》という有名なギルドが協力して倒したようだ。で、リンが言っていた《流星》やら《震源地》はプレイヤーの二つ名のようだ。プレイヤー名は不明。《流星》が《照らす光》のギルドマスター、^{パーフェクトウォール}《移動城壁》がサブマスターらしい。^{フロボロス}《不滅龍》のギルドマスターは《震源地》でサブマスターは知らないようだ。《嵐帝》はギルドには所属せずパーティーで活動しているプレイヤーなんだと。これらの二つ名は数ヶ月おきに行われる《イベント》の時に活躍したプレイヤーに掲示板で考えられた物が付けられる。《イベント》後は二つ名を決めるために掲示板がもの凄く盛り上がるらしい。

《イベント》とは不定期に行われる行事のような物だ。希望者が参加して他のプレイヤーと競い合う。参加する者はその時だけ表示される名前を変えられるらしい。その様子を参加していないプレイヤーは観戦して楽しめるようになっていく。今までに《イベント》は二回行われたようだ。表示される名前は変更することが出来、殆どのプレイヤーが自分の名前を隠して参加する。前の《イベント》で二つ名を付けられると次回では表示名をそれにして参加するプレイヤーもいるようだ。《イベント》時はHPが0になっても死ぬことはない。

《イベント》は今までに二回行われていて、一回目はモンスターを時間制限内に何体倒せるか、二回目は障害物競争のような物だったらしい。もう少ししたら行われる三回目の《イベント》内容はプレイヤー同士の一対一のバトルのようだ。これまで以上に盛り上がる事が期待されている。

とまあこんな感じだ。成る程な。

こんな状況なのに《イベント》を楽しめるってこのプレイヤー達は気楽だなあ。まあ一年もすれば慣れるか。……クソ、俺もイベントに出たかったし見たかった……。

19 (前書き)

まさかの再登場

中腹まで戻ってきた俺達はボスについて話し合うことにした。挑むつもりだったということはある程度の情報は持っているだろう。

「えっとですね、ボスの名前はギガントゴーレムです」

ギガントゴーレムは鋼鉄で出来た巨大な体を持っていてかなり堅いらしい。足が無くて地面から生えているような形。弱点は頭だが背が高くて攻撃が届かない。攻略組は片腕を破壊して攻撃が緩くなつたところに一斉攻撃を仕掛けて倒したようだ。体が硬くて倒すのに相応時間が掛かったらしい。

……聞く限りでは結構強そうだがこの二人はいったいどうやって倒すつもりだったんだ？ 聞いてみると、リュウが斧で腕を壊してその隙にリンが胴体に攻撃して倒すつもりだったらしい。……呆れて物も言えない。攻略組が長時間掛けてようやく倒した相手を二人で倒せる訳ないじゃないか。向こう見ず過ぎるぞ……。

「うー……。だって適正レベル越えてたし、リュウも堅い相手に良く効く打撃系のスキル、結構会得してたから勝てると思ったんですよ……」

頬を膨らませるリンと頭をポリポリと掻くリュウ。こいつらには一度ボスモンスターの恐ろしさを教えてやる必要があるな。適正レベルを超えていたとしても3や4レベル程度じゃ駄目だ。ボスは集団で挑むようにレベル設定されてるんだからな。適正レベルをちょっと超えたからって余裕だな、とか調子乗ると九回ぐらい死ぬぞ。

「あ、そう言えばですね、最初のイベントの時に敵モンスターとし

てギガントゴーレムが出たんですよ！　その時にそのゴーレムを一人で倒した斧使いの人、知ってますか！？」

唐突に話題を変えやがった。こいつ全然ボスの怖さが伝わってないぞ……。リユウが妹の様子に苦笑している。リンって気が強そうだからお前も苦勞してるんだな、と目で労いの言葉をかけてやる。伝わったかどうかは分からない。んー、でも一人でボスモンスター倒すって結構な事だよな。最初のイベントって事はまだ全員そこまでするレベル高くなかったはずだし。少し気になる。俺が知らないな、と答える前にリンはその人について語り始めた。

「その人の二つ名は《巨人殺し》^{ゴーレムスレイヤー}！　《兜割り》でギガントゴーレムの腕を壊して《スイング・スクエア》で止め刺すところ格好良かったなあー！　赤色の髪をしてて滅茶苦茶イケメンなんですよ！　あーあー、私がもうちょっと大人で強かったらあの人のパーティーに入りたかったなあー」

リンの言い方だとその《巨人殺し》^{ゴーレムスレイヤー}とやらはギルドには入ってないらしいな。そんなに強いって事は色んなギルドに勧誘されたんだろう。なのに何でギルドに入らなかったんだ？　ギルドの方が安全だろうに。《嵐帝》といいそのイケメンといい、強いのにギルドに入らない奴が結構いるな。まあギルドに入ったらルールとかあるだろうし、俺は入りたくないけど。もしかしたらその人達も自由にやりたかったのかも知れない。それにしても赤髪が地毛って事はないだろうし外見の設定弄ってるだろ。俺ももう少しイケメンに設定すれば良かった……。

と言う風に何回か話がわき道にそれて結構時間を掛けながら、ようやくギガントゴーレムを倒す作戦を立てる事が出来た。リンって面食いな……。

作戦はこうだ。リュウとリンがギガントゴーレムの注意を惹き付けて、隙が出来たところで俺がゴーレムに攻撃する。頭が高すぎて届かないというなら《空中歩行》^{スカイウォーク}の出番だ。顔面にスキルをぶち込んでやれば倒せるだろ。リュウに初期装備ですけど大丈夫ですか、と聞かれたが、大丈夫問題ないと返しておいた。まあ防御面では多少不安だが避ければ問題ないだろ。

「じゃあ、行くか」

頂上に近づくにつれ周りに漂っている空気が変わっていくのが分かる。息苦しくなり肌がピリピリと刺激される。グルヴァジオのと同じだ。リュウとリンの喉を鳴らす音が聞こえた。ぶつちやけ情報で聞けたからこいつらは用済みなんだけど、何だか見捨てられない。兄妹だからだろうか。この二人を見ていると妙に心がざわめく。リンは菜に似てないのに何故か被って見える。……まあ見捨てないのは料理作って貰えるからだな。料理楽しみだ。

「っ！？」

地面が大きく揺れた。なんだ！？ この先にはギガントゴーレム以外でないってリュウが言っていたぞ。もしかして誰かがギガントゴーレムと戦っているのか？

「リュウ。話が違うじゃないか」

リュウは、ここにいるプレイヤー達はボスと戦わずにレベルを上げて帰るだけだから、先客はいないと言っていた。この世界のプレイヤーの殆どはボスに挑まずにレベルを上げ、次のエリアの適正レ

ベルを幾つか超えたらそこに移動する、を繰り返して強くなつていくらしい。ボスと戦うにしても何日も掛けてパーティーを募集して念入りに準備するから誰かがボスに挑もうとしたらここを狩り場に行っているプレイヤーはすぐに気付くはずだ。さっきまで中腹にいたがそんな雰囲気は感じられなかったぞ。

リュウはビクツと体を震わせた後、すいまして頭を下げてきた。……そんなに責めるような言い方はしてないんだけどな。

「取り敢えず近づいて様子を見てみよう。ボスと戦っているときに乱入するのはマナー違反だから、誰か戦っていたらボスと戦うのは明日にしよう」

エリア内では基本的にプレイヤーは無干渉。よほどのピンチになつた時は例外だけど、それ以外は自分の力で乗り切らなければならない。

俺達は駆け足で頂上に急いだ。

「うわああああ!! 来るんじゃない!!」

「おい! ちゃんとこいつの攻撃を惹き付けろよ! 逃げ回ってるんじゃない!」

ああ……。リュウとリン以外にも無謀な奴らがいたみたいだな。さっき中腹で俺に絡んできた金髪の二人がギガントゴーレムに追いつめられていた。ボスとの戦闘が始まれば倒すまでプレイヤーは逃げる事が出来ない。外から中に入って助けることは出来るけどな。

ギガントゴーレムは話に聞いた通りに巨大だった。鈍く輝く体はかなり硬そうだ。攻略組が苦戦するのも頷ける。何故か頭だけ岩で

出来てるけどまあんだだけ背が高ければ関係ないか。胴体が地面から生えており移動できないようだ、頂上を中心にいるため全方位に攻撃が届くようだ。腕で体を回転させて逃げ回る金髪達の方を向き、その巨大な掌で押しつぶそうとしている。

ボス戦に巻き込まれないように俺達は頂上の一步手前に立ち、泣き叫ぶ金髪達を眺める。リュウとリンはギガントゴーレムの迫力に飲まれ顔を青くしていた。まあ一歩間違えば自分達が同じ状況に立っていたんだから無理もないだろう。

安全地点から眺めている俺達に気付いたのか、金髪二人がこっちに駆けてきた。二人ともHPが半分を切っており、スタミナも殆ど残ってない。

「お、おい！ 助けてくれ！」

金髪達が透明な壁をバンバンと叩きながら助けを求めてきた。俺達から見るとパントマイムをやっているみたいでこいつらの動きは滑稽に見える。思わず笑ってしまった。

「な、なに笑ってんだよ！ 早くこっちに入って助けてくれ！」

「やべえ、ゴーレムがこっち向いたぞ！」

馬鹿にしていた相手に助けを求めるとか情けない奴らだ。それに頼み方がなっちゃいない。そんなんで誰か助けしてくれると思ってるのか？

リュウとリンが俺の方を見つめてくる。どうするのかは俺が決めて良いようだ。

「お前らは何でボスに挑もうと思ったわけ？」

理由を尋ねてみた。

「い、今はそんなことどうでも良いだろ！？ 適正レベル超えたし
いけると思っただよ！」

「おい！ 早く助ける！ ゴーレムが攻撃してきた！」

ギガントゴーレムが二人に狙いをつけて拳を振り上げるのが見えた。こいつらの今のHPじゃあれをモロに喰らったら死ぬだろうなだから俺はこいつらに言っただけで止めた。

「初期装備でしかも超雑魚い武器を使う頭のおかしい俺じゃあ、あんたらを助けることは出来ません。それに一人の獲物を横取りするのはマナー違反ですしねー」

「ふ、ふざけんじゃねえ！ た、助けてくれ！ 頼む！」

「後で金ならいくらでも払う！ 俺らの武器とか全部上げるから！」

どうしようかなー。さっきあんなに調子乗ってたのにその態度の变化はちよつと気に入らないかなー。俺がニヤニヤと笑みを浮かべていると、肩を叩かれた。振り向くとリンが泣きそうな目で俺を見ていた。

「助けてあげてください……」

どうもこの二人といると調子が狂うな。しょうがない。こんな奴らでも死ぬのは後味が悪いからな。

「行くぞ！」

俺は太刀を抜いて頂上に踏み込み、金髪達の前に立ち拳を受ける。凄まじい衝撃に襲われ、堪えきれず後ろに吹っ飛ばされた。金髪達

を巻き込んで透明な壁に激突し、意識が飛びかける。HPが少し減るのが見えた。

「暁さん！」

リュウとリンが壁を擦り抜けて中に入ってきた。これでもう後戻りは出来なくなった。ここから生きて帰るには目の前のギガントゴーレムを倒すしか無いわけだ。

「す、すまねえ……助かったぜ……」

「お、恩に着る」

金髪達がへこへこと頭を下げてる。ああもう、鬱陶しいから下がってる。

「今から俺達でこいつを倒すからお前らは標的にされないように逃げてろ」

金髪達を押しつけてギガントゴーレムを睨む。

19（後書き）

あまりに外道過ぎるとの事なので、助けるパターンにしました
書き溜めがなくなりました。明日、二話更新できるか分かりません。
取り敢えず、午後3時に一回は更新できそうです。

20（前書き）

明けましておめでとございます。今年もよろしく願います。
金髪達を殺すのは違う、という意見を多々貰ったので直すことにしました。

ゴオオオオオオオオオオオム！！！！！！

新たな標的を確認したギガントゴーレムが咆哮する、凄まじい音量だ。突風が俺達を襲う。リュウとリンは悲鳴を上げながら後ずさった。まあ気持ちは分らないこともない。ただどやっぱりグルヴアジオの咆哮と比べちゃうと大した事ないんだよな。

ギガントゴーレムは首をゴキリと音を立てながら回すと、もう一度咆哮した。突風が再び襲いかかってくる。この二人やつぱりびびってやがるな。よし。

「うらあああああああああ！！！！！」

ギガントゴーレムに負けじと叫びながら、『侍の気迫』を發動する。こいつより俺の方がレベル高い筈だから効くだろ。ギガントゴーレムは咆哮を止め、ビクリと体を震わせる。やっぱり俺の方がレベル高いようだな。ボスがビビってやんの。俺が嘲笑を浮かべると、ギガントゴーレムの口がピクリと痙攣したように見えた。

「来るぞ！」

ギガントゴーレムの主な攻撃方法は普通のゴーレムと同じで腕で殴ること。移動は出来ないが長い腕は頂上全域に届く。

ギガントゴレムの巨大な拳がゆっくりと近づいてきた。大きい分動きは鈍そうだな。作戦通りに行けば瞬殺出来るだろ。

俺達は三手に別れ、拳を回避する。背後で地面が爆発するような音が聞こえたが、気にせずに近づく。リュウとリンがギガントゴールの左右で止まる。俺は二人より少し後ろの位置で様子を見てい

る。

ギガントゴーレムが両腕を使ってリュウとリンに攻撃を仕掛けた。手を大きく開き、その掌で二人を押しつぶそうとする。それをギリギリで回避した二人は、地面にめり込んだ手にそれぞれの攻撃をする。

「《スイング・スクエア》！」

「《スタブ・トライアングル》！」

二人の攻撃が手にヒットする。だがやはりギガントゴーレムはかなりの強度らしく、武器が弾かれてしまっていた。だけどそれで十分だ。

「スカイウォーク
《空中歩行》」

見えない床を蹴りながらゴーレムの顔まで一気に跳んでいく。スaminaを半分ほど消費したが、気にせず攻撃を仕掛ける。使うスキルはグルヴァジオ戦で会得した《オーバーレイ・スラッシュ》だ。まだ使ったことはないが説明文を見る限り強力な威力を持っている。倒せはしないだろうが大ダメージは間違い無しだ。

「オーバーれっ!？」

リュウが攻撃しているはずの右手が、スキルを発動しようとしている俺の横から迫ってきた。銀色の掌で蠅を打ち押すように叩かれる。咄嗟に太刀で受けたが流石はボス、思い切り吹っ飛ばされた。リンのすぐ近くに隕石のように落下する。激突した衝撃で地面を抉る。

「ゲハッ……」

HPが半分ほど削られている。クソ、やっぱ初期装備じゃきついか。俺が今のレベルじゃ無かったら即死してたぞ……。激痛に何とか耐えながら立ち上がり、アイテムボックスから回復薬とスタミナドリンクを取り出して嚥下する。HPが全快し、少しずつ痛みが引いていく。回復薬を飲んだからと言ってすぐに痛みが無くなるわけでは無いのだ。背中が熱い。

「だ、大丈夫ですか!？」

リュウがこちらに駆けてくるのが見える。ギガントゴーレムが攻撃してきていることに気付かず。巨大な拳がすぐ側まで近づいてきたぐらいで、ようやく気付いたようだ。顔を引きたらせ体を硬直させる。俺はまだ痛みが引いていない。とても動ける状態ではなかった。それでも何とか動こうとして、俺より先に走り出したリンに気が付く。

「お兄ちゃん!!」

普段はリュウと呼び捨てにしているリンが、お兄ちゃんと呼びながらリュウに飛びつく。ギガントゴーレムの拳は二人には当たらなかった。だが、攻撃の衝撃がリュウを庇ったリンの背中に直撃する。彼女のHPが四分の一ほど削られる。ダメージはそこまで大きくないが、激痛を感じる。リンは顔を顰めてぐったりとした。

ああ。妹に助けられる兄を見るのってこんな気持ちなんだな。自分がいままで癡にできた行動を思い出すと吐き気がしてくる。なんて情けないんだ。格好悪いにも程がある。見ていられない。恥ずかしい。苛つくから後でリュウには説教だな。だからここで死なれちゃ困る。

地面に倒れたままの二人に向かってギガントゴーレムがもう片方の腕を使って攻撃する。今度こそ二人は避けられないだろう。リュウはともかく、リンは確実に死ぬ。二人はお互いに抱き合い、ギュッと目を瞑った。

痛みが引いて動けるようになった俺でも、流石に二人同時に抱いて助けるなんて真似は出来ないな。だったら受け止めてやる。拳が二人を押しつぶす寸前に間に割り込み、全力で太刀を叩き付ける。全身に凄まじい衝撃が走りHPが二割ほど減少する。だが拳を止めきる事が出来た。後ろの二人は無事だ。

「おい、リュウ」

「……な、何ですか」

「ちょっと後ろに下がってろ。このゴーレムは俺が相手する」

「なっ……で、でも」

「60レベルの俺を心配するなんて良い度胸だな。いいからリンと一緒に下がってろ」

「っ……はい！」

「おいっ金髪達！ こいつらを守ってろ！ こいつらが死んだらお前らを殺す！」

「わ、分かった！」

リュウがリンを抱きかかえて後ろに走っていく。金髪達が二人に向かって走っていき、自分達の後ろに匿った。大剣を構えて震えている。頂上にいる限り安全な場所はないが、俺がこいつの気を惹き付けておけば問題ない。

「案外脆いんだな」

粒子が漂い、まるで“流れ星”のようだ。

「《流星》……………」

下でリュウが何かを呟いた気がした。だけど上手く聞き取れず、何て言ったかは分からない。

《オーバーレイ・スラッシュ》は十連続で相手を斜めから斬り付けるスキルだ。刃が一度岩の頭を斬るたびにHPが大幅に削られ、スキルが終わったときにはギガントゴーレムのHPバーは空になっていた。

ゴアアアアアアアアアアア！！！！

悲痛な叫びを上げながら、ギガントゴーレムが崩れ落ちていく。予想外の事も起きたが何とか倒せたな。地面に着地しながら安堵の溜息を吐く。ポーンと音がし、レベルが61に上がる。ボスって経験値馬鹿みたいに多いし、パーティー人数が少ないから結構入ったみたいだな。あの二人もいくつかレベルが上がったんじゃないか？ おーい、とリュウとリンが叫びながらこっちに向かってくるのが見える。金髪達も興奮した面持ちで一緒に来ている。まあ、あいつらはどうでもいいな。それにしてもあの兄妹を見ると何か調子が狂う。情緒不安定だ。

その時、ピローンと気の抜けた音が聞こえてきた。チャットが飛んできたようだ。送り主はレンシアさん。

『防具と武器出来たよー（^^）／』。

ああ。あの人顔文字とか使うのか……。

頂上の奥の方に緑色の門が現れる。ワープゲートだ。

「
帰
る
か
」

21 (前書き)

和食最高

「すいませんでした！」

街に帰った俺達はリュウとリンが泊まっているという宿に来ていた。さっきまで金髪達が「っべー。マジっべー。ちょ、ガチありがとうございました」とか言ってきたてうざかったかな。金とか出そうとしてたけどもう十分あるから返してさっさと消えるようにいつてやった。そしたら「っべー。マジかけー」とか言って目を輝かせて見てきやがった。気持ち悪いからさっさと帰れ。

ここの作りは俺の泊まっていた宿と同じだが、NPCに頼むと有料でキッチンを出してくれるらしい。俺の所は泊まるどころしなくてキッチンとかは無かったはず。

頭を下げるリュウとそれを不安そうに見つめるリン。やっぱり俺が苛めてるみたいだ。

宿に着いた後、俺はリュウに妹を危険に晒した事を怒った。若干余計な事しやがって、という俺の私怨も混ざっているような気がする。

「兄は妹を守ったり助けたりするために産まれるから、“兄”って言うんだ。その兄が妹を傷つけてどうするんだ、リュウ。リンをしっかり守ってやれ」

リュウはその言葉に感動したようでコクコクと何回も頷いた。全く、どの口が言うんだか。というか当初はエリアで他のことに気を取られるな、という事を言おうとしたのに何で兄とは何たるかの話になってるんだよ。俺訳分からなさすぎ。こんな事言うなんて俺らしくないぞ。キャラがブレブレだ。しっかりしろ、俺。

「その、暁さんは妹が弟がいるんですか？」

リンが不思議そうに聞いてきた。まあ一人っ子がこんな事言うわけ無いからな。兄失格な俺としてはあまり答えたくない質問だぜ。

「いるよ、妹が。あいつもこの世界に来てる。今何してるのかは知らない」

「そうなんですか……見つかるといいですね」

「……………」

俺は栞を見つけてどうするつもりなんだろう。さっきまで会って謝るとか盛り上がっていたけど、謝ってからどうするつもりなんだ。あいつには確か仲間がいた。その中に混ざって貰うのか？ それ以前に栞は俺を見捨てたんだぞ？ あの状況で見捨てると言うことは言外に「死んでも構わない」と言われていたと言うことだ。それに今更謝ってどうにかなるのか？ 「はあ？」と聞き返されて終わりなんじゃないのか？ 俺の心の中に黒い感情が渦巻いていくのを感じた。心の中で自分が尋ねてくる。本当にお前は栞に謝りたいのか？ 謝ってどうしたいんだ？ 栞をどうしたい？

—— お前は自分を見捨てた栞が憎くないのか？

「暁さん、どうしたんですか？」

リュウに呼びかけられて正気に戻った。ボーッとしながら俺は何を考えてたんだ？ 心の中でもう一人の自分と対話するとかどんなバトル漫画だよ。俺、自分に甘いから自分に勝つとか無理だぞ。

「悪い悪い。ちょっとボーッとしてた。それよりこれからどうするんだ？」

「どうしよう……あつ、リンが料理を御馳走する約束してましたね！」

ああ、すっかり忘れていた。俺が聞いたどうするは、組んでいるパーティーをどうするかって事だったんだけど、まあその話は何か食べてからでも遅くない。

話を振られたリンがちよつと気まずそうな顔をした。

「えーつとね、そう言えば今材料切らしてたみたい。それで、なんか買つてこないといけないんだけど……」

リンが申し訳なさそうにそう言った。材料無いのか。結構腹減ってるからすぐに食べれないと聞いてちよつとガツカリ。

「それで、今から食材仕入れて来ようと思うんですが暁さんは何が食べたいですか？ あんまり手の込んだ料理は無理なんですけど……食べたいのとかあつたら……」

食べたい物か。いざ聞かれるとそんなに出てこないな。ここ一年果物と生肉しか食べてなかったからなあ。はあ。ニートしてるときに祖母が作ってくれた白いご飯とみそ汁と焼き魚と漬け物が食べたい。

「お米とかみそ汁とか和食って言うのかな。そう言う系作れる？」

一応聞いてみると意外そうな顔をされた。なんだよ、和食って素晴らしいんだぞ。炊きたてのお米とか熱々のみそ汁とかはまさに神だ。日本に生まれて良かった。

「暁さんて和食好きなんですな。作れますよ？ お米とか味噌と

か売ってたはずだし。リュウ、私買い物行ってくるから曉さんよろしくね」

俺の注文を聞いたリンはリュウにそう言つと扉を開けて出て行つてしまった。元気な子だな……。リュウも音を立てて閉まる扉を見て苦笑いを浮かべていた。うん……。お前も苦労してそうだな。頑張れよ。目で応援の言葉を送っておいてやる。伝わったかは知らん。買い物から帰ってきてても作ってる時間で結構掛かりそうだし、レンシアさんの所に防具を取りに行ってくるか。

「リュウ、俺はちよつと行きたいところがあるからちよつと出かける。料理が出来る前には帰ってくるから」
「えっ、はい。分かりました」

リュウにそう告げて宿から外に出る。向かう先はあの鍛冶屋だ。プレイヤーの視線を無視しながら小走りで向かう。もう場所は覚えていたからすぐに着くことが出来た。人の武器をジロジロ見るなんて不躰な奴らだな。

相変わらずささくれた扉を半日ぶりに開けると、「らっしゃーい」と相変わらず気の抜けた声が聞こえてきた。カウンターまで行くとレンシアさんが「待ってたよ」と眠そうに言った。

彼女の手から太刀と防具が急に現れ、カウンターに置かれていく。手品みたいだな、と思った。

「やっぱり凄い素材だったよ。こんだけしか作ってないのに鍛冶スキルが大分上がった。やっぱりただ者じゃないねー曉君」

「それで、どれくらい払えばいいですか？」

「んつとー、十万テイル」

十万テイルって結構高いな。確か防具とか武器はレア度が高けれ

ば高いほど作るのが大変だった気がする。そして鍛冶スキルのレベルが高ければ高いほど完成するまでの時間と完成度が高いんだっけ。まあ有名な鍛冶屋とかはレベルの高いエリアにいるだろうし、注目されるからここぐらいが丁度良いんだけどね。

「分かりました。ありがとうございました」

十万テイルが入った袋をカウンターにポンと置き、防具と太刀を回収する。因みに、お金を払わなかったり盗んだりすると、この世界の果てにあるという刑務所に強制ワープさせられる。そこで何かペナルティを受けるようだ。それと、何故かPKだけは強制ワープさせられない。ステータスにある『PK報告』というメールを運営に送らなければ罪には問われない。ここに運営の悪意を感じるのは俺だけじゃないはず。

「……毎度ありー。ああ、その防具と太刀にはスキルが付いてたから。後で確認しておいてね」

スキルが付いていたのか。出来れば《生命力》とかが欲しいな。即死が回避できれば生存率がかなり高くなる。防具を着るのは後にして、俺は鍛冶屋を後にした。後ろで「暁君かー。顔覚えてたからねー」と聞こえたけど無視した。

21 (後書き)

っ
べー
ま
じ
っ
べー

22（前書き）

何かすっげーどうでも良い回なのに今までで一番長いんじゃないか？無駄が多くてすいません。でも美味しいんです。美味しいからしよつがないんです。

宿に戻るとリンは既に帰ってきていた。今キッチンで料理しているらしい。楽しみだ。もうしばらく掛かるとの事なので、リュウと話をすることにした。

「なあ、太刀使ってるプレイヤーって他に知らないか？」

俺がそう話し掛けるとリュウは難しそうな顔をして答えた。

「うーんっと、少なくとも攻略組にはいないと思います。それとエリアで太刀を使っている人は最近は見ませんね。半年前まで運営があんな事を言ったのは太刀に何か秘密が隠されているに違いない、と使っている人を数人見かけたんですが……」

確かに運営のあの言い方はおかしい。混乱している状況でああ言われたら信じてしまう人もいるかも知れないが、冷静になれば何かある、と思うのが普通だ。他の攻略組がどんな様子なのか直接見ていないので俺が何か特別な力を持っても分からないが……。まあ武器を変えるには手間が掛かるし、熟練度が0になったり面倒だから俺はこのまま太刀で行くつもりだ。そんなに言われてるほど酷い武器でも無いしな。稀少武器レアウエボンを手に入れられれば一も二もなく変えるけど。

稀少武器レアウエボンとは文字通りレアな武器だ。武器の熟練度を上げていると稀に手に入るらしい。どんな物があるのかは知らないが、熟練度はそのままらしいので是非欲しい。

「稀少武器レアウエボンを使ってるプレイヤーとか知ってるか？」

気になったので聞いてみた。

「稀少^{レアウエボン}武器ですか。んーと、有名な方だと《流星》さんが片手剣の稀少^{レアウエボン}武器“バスタードソード”を使っていますね。誰が持っているとかはあまり詳しく知らないんですけど、“サーベル”とか“矛”とかあるそうです。この二つは稀少^{レアウエボン}武器の中でもポピュラーで、どうやったら出るとか掲示板を調べれば出てくると思いますよ」

ふむ。片手剣の稀少武器は“バスタードソード”なのか。何だその剣は。“サーベル”とか“矛”なら分かるけど“バスタードソード”は聞いたこと無いぞ。マスタードソースみたいな語感してるけど、どんな武器なんだ？ 是非間近で見たいな。太刀にも稀少^{レアウエボン}武器はあるんだろうけど、使ってる人が少ないからなあ。まあ殆ど使ってる人が少ないんじゃない太刀自体が稀少^{レアウエボン}武器みたいな物か。

「一つ聞きたいんですけど、いいですか？」

リュウが興奮を抑えるような顔つきで言ってきた。ん？ 構わないけど。

「曉さんって稀少^{レア}スキル持ってますか？ 何か四段ジャンプよりも高く飛んでたし、消えてたし、見たこと無いスキル使ってたので……」

あー、やっぱり見られたか。稀少^{レア}スキルを持ってるのと知られると他のプレイヤーから根掘り葉掘り聞き出されそうだから人前で軽々しく使う物じゃないな。まあこいつなら言いふらすような真似はしないだろ。

「ああ、持ってるぞ。二つ」

「ほ、本当ですか！？　うわはー！！　二つって、凄い！」

リュウのキャラがよく分からなくなってきたぞ。うわはーって
お前。

「稀少^{レア}スキルってどんなのがあるんだ？　出来れば教えてくれ」

「えっとですね、確か《流星》さんが《幻影》と《癒しの光》というスキルを持ってたと思います。それから、《移動城壁^{パーフェクトウォール}》さんが《裁きの一撃^{リベンジ}》を、《震源地》さんが《アースシェイカー》というスキルを会得していた筈です。他にも《嵐帝》さんが何か持っていた筈ですけど忘れてしまいました。すいません」

有名なギルドのトップでも稀少^{レア}スキルは持っていて二つか。もしかして俺ってかなりついてるんじゃないか。

「あとですね。比較的会得しやすい稀少^{レア}スキルに《自然治癒》とかあります。《自然治癒》はあんまり回復薬を使わずに寝たりして回復していると会得出来るようです」

そうなのか。やっぱり情報を集める事は大切だな。今日の夜、寝る前に色んな掲示板をしっかりと覗くとしよう。仲間募集した時に何故か某掲示板のようなノリで対応されたけど、あれはなんだったんだろう。嫌いじゃ無いんだけどさ。

「……ギガントゴーレムを倒すとき、使ってたのってオーバーレイ系のスキルですよね？」

オーバーレイ系って事は他にもオーバーレイの付くスキルがあるのか。

「そうだが」

「オーバーレイ系のスキルは使い手によって色と威力が変わってくるんですよ。緑色とか赤色とか人それぞれなんです。で、大体がそこまで強い威力は持っていないんですけど、一人だけ凄まじい威力のオーバーレイスキルを使っているプレイヤーがいます。その人の色は銀。暁さんも確か銀じゃありませんでした？」

「ああ……確かに銀だった。そのプレイヤーって誰なんだ？」

「《流星》さんです。この二つ名はイベントでオーバーレイを使ったときに見た目が“流れ星”みたいだった事から来ています。掲示板によると、同じ色をしたオーバーレイを持った人は滅多にいないそうなんです……」

《流星》と同じ色だったか。その《流星》って言うのはいったい何者なんだ。

「色や威力が変わるのはどういう理由なんだ？」

「んーと、レベルとか武器とかは関係なくて、ハッキリとは分かってないらしいです。“運”で決まるって言ってたプレイヤーもいたような気がします」

運か……。そう言えば、【幸運】っていう称号を持ってたはずだけど、あれは何か関係あるんだろうか。

「リュウー暁さん、出来ましたよー」

「行きましようか」

「ああ」

リンが扉を開けて中に入ってきた。料理は下の食堂で食べることが出来るようだ。俺とリュウは話をやめ、食堂に向かった。近づくに連れ漂ってくる美味しそうな匂い。胃が早くよこせと騒ぎ立てる。

「おっおおお！　うわははー！！」

机に並べられている料理を見て、俺は思わず変な声を出してしまった。ただどしようがない。艶っぽく輝く湯気を出しながら茶碗の上に所狭しと盛られている。これだけでも嬉しいのに、隣には同じく湯気を立てるみそ汁が。更に焼き魚に漬け物、卵焼きなど、まさに俺好みのメニューだ。

「えっと、こんなんしか作れないんですけど……」

リンが不安そうに俺を見てくる。

「いやいやいやいや！　最高だね！　ありがとう！」

並べられた椅子に腰掛け、早速みんなで食べることにした。全員で手を合わせて、「いただきます」。夕食なのに朝食っぽいメニューだけど気にしない。このメニューなら朝昼晩いつでも歓迎だ。

やっぱり最初は白いご飯を食べよう。炊きたての良い匂いを嗅ぎながら、大きく一口。熱さにハフハフしながら良く噛んで味わう。炊きたてのほくほく感、固すぎず柔らか過ぎない絶妙な米、噛みしめるたびに染み出てくるお米独特の甘さ。まさかこんな旨い米が仮想空間で食べられるなんて驚きだ。次はみそ汁。火傷しないように息を吹きかけて少し冷まし、汁を飲んでみる。Oh……これは素晴らしい。俺は少し濃いめのみそ汁が好きなんだが、まさに丁度良い濃さだ。しょっぱいという程の濃さではなく、味噌の味がよく分かるくらいというか。中に入っている具もいい。わかめにジャガイモ、豆腐に油揚げ。一つ要望を上げるなら、茄子を入れて欲しかったな。祖母のみそ汁に入っていた茄子は柔らかくて美味しかった。まあ無くて也十分に美味しい。それから漬け物、たくあんを摘む。黄色い体

は美しく輝いており、それでいてなかなか太い。ずっしりとした重量感が箸から伝わってくる。噛むとコリッという小気味よい音とともにしつかりとした味が出てきた。それから焼き魚。焼き具合は表面の皮に少し焦げ目が付いているぐらい。祖母の焼き魚たまに真っ黒だったなあ。この魚の焼き具合はかなり良いと思う。箸で身をほぐし、皮を裂いて肉を取り出す。白い身は輝いており、神聖さすら感じられる。一口口に含むとほう、と感嘆が口から漏れた。脂が乗っていて良い食感だ。パサパサしていない。コンビ二弁当とか祖母の焼きすぎた焼き魚は脂が落とされて身がパッサパッサでとても食べれた物じゃ無いけど、この焼き魚は神だ。パサパサの焼き魚を食べるの口の中の水分がなくなつて、パッサパサ！ パッサパサ！ 口の中パッサパサ！ どうしてくれんのパッサパサ！ と叫びたい気分になるけどこれはそんなことは全くない。ほどよい塩味だ。白いご飯が食べなくなる。何の魚かは分からない。見たことがない形をしている。味もどこか今まで食べた魚とは違う。

「それは槍魚と言うそうですよ。槍みたいに頭で敵を刺して攻撃するから槍魚と言うらしいです」

リンが魚を見つめていると教えてくれた。成る程槍魚と言うのか。現実では聞いたことがないからこの世界にしかない魚なんだろう。現実にはいないのにどうやって味を決めているんだろう。うーむ……興味深い。槍魚、覚えておこう。

そしてそれから卵焼き。俺は甘いのも塩辛いのも大好きだ。この卵焼きは……甘いな。だが糖分控えめ、って感じた。甘すぎるとご飯に合わないからこの味付けは好きだ。形が整っていて焦げてない。そして身がとても柔らかい。よくこんな柔らかいのをこの四角い形に出来たものだ。卵焼きを頬張り、ご飯を一口。それからみそ汁を啜ってたくあんを嚙り、焼き魚を食べてご飯を一口。約一年ぶりのちゃんとした料理はとてつもなく旨く、思わず何も言わないで黙々

と食べてしまふ。しばらくしてから、リンが不安そうな顔で俺の食べる様子を見ていることに気付いた。その横ではリュウが美味しそうに食べている。おい、お前焼き魚の身の出し方下手だな。バラバラじゃないか。しかもみそ汁零してるし、ちゃんとしろよお兄ちゃん。

「あの、どうですか？」

リンが恐る恐るといった感じで尋ねてきた。どうですって、そりゃあこれ滅茶苦茶美味いに決まってるじゃないですかお嬢さん。やばい、なんかテンションが変なことになってる。ただでさえ最近キヤラが安定してないのに余計おかしくなっちまうぞ。

「滅茶苦茶美味しい。これなら毎日でも食べたい」

俺が率直な感想を伝えるとリンが嬉しそうに笑い、その後ハツと顔を上げて俺の事を見てきた。頬がほんのりと赤くなっている。褒められたのがそんなに嬉しかったのか？ 毎日でも食べたいってなんかプロポーズみたいな感じだけど今更そんな解釈はしないだろうし。

リンは下を向いて俯き、何かを呟き始めた。何事だよ。リンのキヤラもよく分かんないな。リュウもテンション上がるといわはー、とか言い出すし、みんなキヤラがブレブレだぞ。

リュウが俺とリンの様子を微笑ましそうに見ている。何だよその笑いは。

「その、曉さん……」

リンが顔を上げてゆっくりとしゃべり出した。ん？

「よければ、私のご飯を毎日食べて貰えませんか？」

ちょ……何この状況。っべー。まじっべーぞおい。

22 (後書き)

リンちゃんっベー、マジっベーぞ

23 (前書き)

両手剣を双剣に変えました。

俺が戸惑ってあ、う、と変な声を出しているとリングがハッとした表情をした後、また顔を真っ赤にしてブンブンと首を横に振った。

「そ、そういう意味じゃなくて！ 私たちと正式にパーティー組んでくれませんか！？」

ああ、そういう意味か。俺が変な風に勘違いしちゃったみたいだ。ふむ。こいつらと組むことによって俺が得る利益を考えて答えを出す、当然NOだ。こいつらは俺より遙かにレベルが低いし、足手纏いにしかない。それから自由行動も出来なくなる。

「もし、組んで下されば毎日得るテイルの半分を暁さんに渡します。それ以外でも言うことは聞きます」

それでも答えはNOだ。金自体は不便してないし稼ごうと思えば自分で稼げる。こいつらを連れていたら高レベルのエリアには行けないだろう。リュウの話なら俺は攻略組に入れるくらいのレベルを持つてるそうじゃないか。低レベルのプレイヤーからチャホヤされたいとも思ってる。このままダラダラとしていれば攻略組からはどんどんレベルを引き離されていくだろう。それは嬉しくない。

……………。

料理の味が好みだから一緒に行動する。これはあり得ない。自分でも作ろうと思えば時間は掛かるが作れるようになるだろうしな。だから毎日料理を作って貰うために一緒に行動するなんていうのは選択肢にはない。そもそも最初からボスを倒すまでと言う約束だったんだしな。

「お願いします。曉さんといれば強い相手とも戦えますし、僕らも頑張って強くなりますから！」

リュウも頭を下げてお願いしてくる。だからそんな風にされたって嫌なんだってば。確かに一緒にパーティー組んでエリア行ったりこうやってご飯食べるのは悪い気はしない。……んー。なんだろうなこの気持ち。この二人と一緒にいるのは悪い気分じゃない。ずっとパーティー組んでるって言うのはあれだけど、もうちょっとだけ一緒に居てやつても悪くない……か？　こうやってズルズル引き延ばすのは良くないと思うけど、もうちょっとだけ一緒にパーティーを組んでいたい気もする。そうだ、次のエリアをクリアするまでパーティーを組んでやろう。

良くは無いと自分で分かっていると言うのに、俺の口は動いていた。

「分かった。次のエリアをクリアするまでなら良いぞ」

「「ホントですか!？」」

少し前にも同じ反応をされた気がする。リュウとリンは頬を上気させ、二人で喜んだ。こういう反応をされて悪い気分になる奴もいないんじゃないか？　俺も思わず頬を緩ませてしまう。

引き籠もるまではこうやって家族と一緒にご飯を食べてたっけ。懐かしいな。

久しぶりに温かい食卓だった。

翌日、俺達はレンシアさんの鍛冶屋に来ていた。理由は勿論、二

人の防具を作って貰うためだ。ギガントゴーレムの素材を渡し、三時間ほど街の中をブラブラしていると出来たというチャットが飛んできたので、鍛冶屋に向かい金を払って受け取る。勿論、リュウとリンが自分の金で払った。金持ちとはいえ、恵んでやるほど甘くはない。いや、こうやってパーティー組んでる時点で十分甘いかな。

この後、太刀使いは目立つと言うことで仮面を買うことにした。声色を変える仮面というのが売っていたので三枚ほど買った。なかなか値が張ったが仕方がない。必要出費だ。宿に戻った後に装備してみた。声が低くなり、なんとも格好いい感じになった。自分の喉から違う人の声が出てくるのは変な感じだけど。仮面は狐の様な形をしていた。狐面を尖らせたような形というか、カクカクしている。色は白と赤。なかなかシンプルな出来だ。嫌いじゃない。鏡で見てもみたが結構迫力が出ていて良いと思う。リュウとリンも似合ってると言ってくれた。これで顔が広まるような事は無いだろう。もっと早くに買っておけばよかったな。と言っても太刀を使っていれば目立つんだけだな。

それからレンシアさんにグルヴァジオの素材から作って貰った巨青熊の防具一式と、『斬鬼・青』も装備した。彼女が言っていたとおり、防具と太刀にスキルが付加されていた。防具の方には『強靱な生命力』という見たことのないスキル、『斬鬼・青』には『巨青熊の威圧』というスキルだ。『強靱な生命力』って事は『生命力』の強化版だろうか。後でしっかり調べておこう。

巨青熊の防具はとても軽かった。上手く言えないが体の一部になるような感じ。装着口に青色の毛が付いていてフワフワしている。初期装備とは比べ物にならないくらい防御力は高いだろう。これでそんじよそこらのモンスターの攻撃は通らなくなる。そして太刀『斬鬼・青』。名前に青と入っているだけあって柄や刃は青色だ。光を当てると刃がうつすらと青色に見えるようになってる。凄く格好いい。『血染め桜』も結構レア度の高い武器だから、売らずにアイテムボックスの中に入れておくことにした。もしもの時の保険だ。

その後回復薬やスタミナドリンクなどのアイテムを補給し、次の街に行くことにした。リュウとリンのレベルは次のエリアでもやっていける程度はあるから大丈夫だろう。防具も新調し《生命力》のスキルも手に入れたし、前みたいにもンスターハウスに囲まれない限りは多分大丈夫だ。まあ俺も居るしな。

《アンデッドカーニバル》。次のエリアの名前だ。掲示板で調べてみたところ、ゾンビやポーンナイトというホラー系のモンスターが出てくるらしい。出現する数が多いから経験値稼ぎには良い場所なんだと。ホラーは嫌いじゃないけどグロテスクなのは嫌だな。街の中央にあるワープゲートを使用し、《アンデッドカーニバル》へワープする。クリアされたエリアにはどの街にあるワープゲートからでも行くことが出来るようになってる。

緑の光に視界が包まれる。

Name: 暁

Level

Weapon: 太刀『斬鬼・青』

スカイウォーク

Skill: 《ステップ》《空中歩行》《隠密》《見切り改》《察

知》《受け流し》《ライト・スクエア》《クリア・スタブ》《兜割

り》《抜刀斬り》《侍の気迫》《麻痺耐性》《毒耐性》《ヘヴィ・

スクエア》《残響》《真空斬り》《間合い斬り》《オーバーレイ・

スラッシュ》《強靱な生命力》《巨青熊の威圧》

Title: 【畏土】【下克上】【赤い紋章】【太刀初段】【太刀

二段】【幸運】【俊足】

Strength: 234

Agility: 251

Endurance: 172
Vitality: 210
Dexterity: 130

Name: リユウ

Lv 27

Weapon: 斧『レックスアックス』

Skill: 《ステップ》 《ジャンプ》 《見切り》 《察知》 《隠密》
《兜割り》 《フルスイング》 《スイング・スクエア》 《生命力》

Title: 【斧使い初段】

Strength: 101

Agility: 94

Endurance: 52

Vitality: 87

Dexterity: 53

Name: リン

Lv 26

Weapon: 槍『トリケラスピア』

Skill: 《ステップ》 《ジャンプ》 《見切り》 《察知》 《トライアングル・スタブ》 《なぎ払う》 《生命力》

Title: 【槍使い初段】

Strength: 87

Agility: 95

Endurance: 45

D	V
e	i
x	t
t	a
e	l
r	i
i	t
t	y
y	:
:	7
1	8
0	
0	

23（後書き）

展開が遅くなってきました。
次は掲示板ネタです。

24（前書き）

予告通り掲示板ネタです。かなり短いですすいません。

【イベント】ブレオン雑談スレ1013【間近】

138 : この冒険者がすごい！ ID:63125
俺攻略組じゃないけど超強いぞ

139 : この冒険者がすごい！ ID:00211
<<138

お前それデスボルケーノでも同じ事言えんの？

140 : この冒険者がすごい！ ID:19718

そういえば他の掲示板でも見たけど、ゴーレム山で太刀使ってる奴がいたらしいな。

141 : この冒険者がすごい！ ID:44263
<<140

初期装備でゴーレム薙ぎ倒してたらしい

142 : この冒険者がすごい！ ID:00211
<<140

デマだろ？前も太刀が太刀が騒いでたけど結局誤情報だったし。と
いうか初期装備でゴーレムマウンテンとか無理だろ。

143 : この冒険者がすごい！ ID:24243
<<142

ガチ。俺目の前で見てたけど、ギガントゴーレムをほぼ一人で倒してた。めっちゃくちゃ強かった

144 : この冒険者がすごい！ ID : 28280
<<142

俺も見てた。銀色のオバレスキル使ってた。しかもボスそれで一撃。
レアスキルも多分持ってた

145 : この冒険者がすごい！ ID : 63125
<<143 - 144

デマ乙。太刀でしかも流星たんと同じ色で今まで話題に上がらない
のはおかしいだろ。一時期太刀には秘密があるとか騒いでた奴居た
けどもうどうでもいいわ。

146 : この冒険者がすごい！ ID : 19718
<<143 - 144

つつかお前ら凄いIDだなww

147 : この冒険者がすごい！ ID : 44263
ゴーレムで思い出したけど、今回も巨人殺しさんとか出るんかな？
今回のイベントってレベル制限あったよな？

148 : この冒険者がすごい！ ID : 63125
<<147

レベル50以上しか参加できないんだっけ。流星さんと地震さんは
出るらしいぞ。

149 : この冒険者がすごい！ ID : 76103
俺が出るって聞いたのは

パーフェクトウォール

《流星》《移動城壁》《震源地》ゴレムスレイヤー《巨人殺し》《海賊王》（笑）《

ヘカトンケイル》《風姫》

ぐらいだな。《嵐帝》は出ないらしい。

1 5 0 : この冒険者がすごい！ ID : 0 0 2 1 1
< < 1 4 9

乙。海賊王さん出るのかw w w 眼帯とか船長帽子みたいな奴またつけてくるのかw？

1 5 1 : この冒険者がすごい！ ID : 6 3 1 2 5
海賊王さんのギルドに入りたいわw w

1 5 2 : この冒険者がすごい！ ID : 9 4 3 2 1
確か前回のイベントで上位だった人ってシード権与えられるんだよな。運営もこのゲームの中に入って俺らの事見てるんじゃない

1 5 3 : この冒険者がすごい！ ID : 0 0 2 1 1
嵐帝さん出ないのか。と言うことはシード一つ無くなったな。
流星ちゃんと地震どっちが強いんだろ

1 5 4 : この冒険者がすごい！ ID : 2 4 2 4 3
流星ちゃんに決まってんだろk s

1 5 5 : この冒険者がすごい！ ID : 1 9 7 1 8
ぼこられる流星たん……h s h s

1 5 6 : この冒険者がすごい！ ID : 6 3 1 2 5
< < 1 5 5

うつ……ふう
流星たんは俺が守る

1 5 7 : この冒険者がすごい！ ID : 0 0 2 1 1
< < 1 5 6

158：この冒険者がすごい！ ID：81438

<<156

ちょwww

ふう……

157：この冒険者がすごい！ ID：63125

うっ……ふう

イベントまであと一週間か。楽しみだな。

158：この冒険者がすごい！ ID：99211

そう言えば、今地震さんのギルドのメンバーの何人かがゾンビ街に来てるらしい。確か二つ名持ちも一人混ざってた気がする

暇だったから掲示板を覗いてみたが、やっぱり某掲示板のノリじゃん。どうしてこうなった。というかID：24243とID：28280ってあの金髪二人じゃね？ お前ら何やってるんだよ。余計な噂立てるんじゃないよ。俺は一週間後のイベントに参加してドカンと大活躍、一役有名になるつもりだからまだ噂は要らないんだよ。レベル制限50か。と言うことは俺よりもレベルの低い奴が何人も参加してくるって事だな。よっしゃあ《流星》とか《震源地》とか二つ名持ちは厳しいかもしれないが、50レベルぐらいの奴らなら結構楽に倒せそうだな。オーバーレイ系のスキルってオバレって略すのか。掲示板だと勝手な呼び名が付くから過去のを見ないと分からない場合がある。流星さんは《流星》、地震さんは《震源地》の事だろうけどな。というか《海賊王》って何だ。（笑）とか馬鹿にされてるけど二つ名持ちなんだよな。強いのか？ ああー早くイベントの日にならないかなあ。上位入賞者は稀少なアイテムとか貰

えるし。俺も格好いい二つ名付くといいなあ。二つ名持ちとかなんか凄い格好いい響きだしな。

リュウ達にイベントの事を聞くと、見に行くと言っていた。俺の活躍を是非とも見てくれよな、って冗談で言ったら二人が凄い勢いで頷いた。そんなマジになるなよ……。初戦で二つ名持ちに当たって敗退とかなら滅茶苦茶恥ずかしいだろ……。

二人の話によると、イベントは一週間後の正午からスタートするようだ。イベントに参加したい者は三日前から参加者募集が始まるからそこに行けば良いんだと。各街のワープゲートからイベントが行われる会場までワープできるそうなので、三日前になったら応募しに行こう。楽しみだな。

ゾンビ街に《震源地》のギルドメンバーが来ている、か。ゾンビ街って多分、《アンデッドカーニバル》の事だよな。もしかしたら会えるかも知れない。二つ名持ちか。相当強いんだろうな。イベントに出る前に一度戦ってみたいぜ。

24（後書き）

次回はリュウ君視点の番外編です。
ちよくちよく番外編入れると思います。

《Side Story》（前書き）

リユウ視点での話。

《Side Story》

誕生日に二人分の《ドリーム》を買って貰い、《Blade Online》のサービスが開始されると同時に僕と妹はゲームを開始した。

クリアするまで脱出不可能、そんな牢獄に入れられるとは知らずに。

ゲームをプレイするとき、二人とも自分の名前から取ることにした。僕は竜之介（りゅうのすけ）から取ってリュウ、妹は鈴（りん）からそのままリン。ゲームの中で僅かな間だけ使う名前だと思っていた。けど浅田竜之介（あさだりゅうのすけ）という名前は这个世界では意味をなさなくなり、リュウというプレイヤー名が僕を現す名前になった。それは他の人も同じ事だろうけど。斧を振り回してモンスターを倒すとき、自分はリュウなんだなと実感する。この感覚が何なのかよく分からないけど、自分が自分で無くなっていくような気がして気持ち悪かった。

子供だから、と誰にも相手にされず途方にくれていた僕らを拾ってくれたのはタカという人だった。一緒にいるだけで安心できる、そんな雰囲気を持った人だった。タカさんは子供のプレイヤーを集めてギルドを作り、レベルの低いモンスターを安全に倒し、みんなのレベルを上げていった。第一エリアのボスを犠牲無しで倒した僕達は、新しい防具を作って貰い次のエリア《ダイナソージャングル》に向かった。そこでも同じようにレベルを上げていき、全てが順調に進んでいた。こちらに来てから弱気になっていたリンも大分笑うようになっただし、こんな所でも平和に生きていけると思っていた。

《ダイナソージャングル》のボスはダブルヘッドレックスという二つの頭を持ったティラノサウルスの様な姿をしていた。僕達はタカさんの指示に従いながら、時間を掛けてボスを倒した。翌日、新しい武器を手に入れた僕達は調子に乗り、エリアで日が暮れるまで武器の威力を試していた。あの日見た光景は今でも脳裏に焼き付いている。

いきなり現れた槍使いのプレイヤーがタカさんの胸を貫いた。それが運悪く急所に入りタカさんは即死した。HPバーが一瞬で空になる。タカさんは目を大きく見開きながら、自分の胸に生えている物を見て信じられないと言った顔をした後に光の粒となって消えていった。人が死んだというのにそれだけだった。ただ光の粒になっただけだった。モンスターが死ぬのと同じであっさりとしていた。なんの余韻も残さず消えていく。やっぱりここは現実じゃなくて、僕はリュウなんだなと思った。

みんなが啞然としている中、僕が思ったことはリンを助けなくては、だった。リンの後ろから近づいてきていた男に気付き、《フルスイング》を叩き付ける。反撃されるとは思っていなかったようで、その男は攻撃を受けた右腕を押さえて絶叫した。痛みは現実の世界と同じだからね。僕はリンの手を掴み、その男を突き飛ばして走り出した。リンはまだタカさんが死んだことが受け入れられない様子で後ろをジッと見ていた。僕はアイテムボックスからワープロープを取り出す。リンに使うように言ったが、まだ仲間がいると言って使おうとはしなかった。後ろから男達の声が近づいてきている。駄々をこねるリンにみんなだって馬鹿じゃない、ワープロープで逃げているさと言葉を掛ける。納得していない様子だったけど武器を持って来ている男達を見たリンは使う気になっただけ、ワープロープを取り出した。

「リュウ、手繋いで」

リンはワイプロープの放つ緑色に包まれながら、僕に手を伸ばしてきた。いつもは強気なリンだけどその表情は弱り切っていた。

「うん」

リンの手を握り、僕達は完全に光に包まれた。行く場所は《ダイナソージャングル》の次のエリア、《ゴーストマウンテン》だ。PKプレイヤーの居るようなエリアから早く逃げ出したかった。

次に目を開けたとき、僕達は見慣れない街に居た。第二エリアよりもNPCの出している店が多く、夜だというのにプレイヤー達が歩き回っている。どうやら奥のエリアに進めば進むほど街の規模が大きくなっていくようだ。街のすぐ側にある大きな岩で出来た山を見上げながら、僕はそう思った。

近くにあった宿に入り、泊まることにした。シャワーを浴びた後、僕達は何もすることが無く、寝ることにした。リンがPK報告しなくて良いの、と聞いてきたがあれをするにはプレイヤー名を知っている必要がある。何でこんなやり方にしたんだ。このゲームの運営が信用できないのは初日で分かった事だけだね。

防具と武器を置き、ベッドに入る。目を閉じるとタカさんが消えていく様子が再生され、眠れない。仲間はどうしたんだろうか。生きているだろうか。リンにはああいったけど、恐らくみんな殺されてると思う。タカさんが死ぬ様子を見てみんな呆然となっていたから、多分反撃できずに殺されてしまったと思う。

「リュウ……一緒に寝ていい？」

僕が返事を返す前にリンがベットの中に入ってきた。枕の上にリンも頭を乗せてくる。二人で向かい合う形になった。リンは結構綺麗な顔をしていると思う。知らない人が見たら恋人同士に見えるだろうか。

「タカさん……死んじゃったよ。みんなも……」

リンが顔をクシャリと歪ませて僕の胸に埋めてくる。僕の目頭も熱くなり、涙が零れそうになるけど瞬きして堪える。僕は鈴の兄、竜之介だ。殆ど同時に生まれたとはいえ、僕が兄なんだ。妹の前で弱気になるわけにはいかない。今、こいつを守ってやれるのは僕だけなんだから。

「お兄ちゃん……お兄ちゃんはどこにも行かないで」

リンが僕の体を強く抱きしめる。

「うん。大丈夫だよ。リンは僕が守るから」

何種類ものゴーレムが空から落下してくる。モンスターハウスだ。クソ、まさかこんな所に罠があるなんて。

殺到してくるゴーレムをリンと連携しながら倒していくが、駄目だ数が多すぎる。何をやっているんだ僕は。リンを守るって決めたのに、なんでこんな。

徐々にHPが削られていく。モンスターの数は一向に減らない。このままでは僕達がタカさんと同じように死ぬのは時間の問題だっ

た。

「加勢するぞ！ 大丈夫か！」

天は僕達を見放しては居なかった。誰かが助けに来てくれたようだ。彼は初期装備に太刀という常識外れな格好をしていた。それなのに、ゴーレムを次々と斬り倒していく。そして空を飛んで僕達の後ろまで一気に移動し、背後から攻撃しようとしていたゴーレムを切り伏せた。僕達を救いに来た天使と言うよりは、化け物のような印象を受けた。彼がモンスターを殺しているときの目からはどこか楽しんでいるような感じがする。この人はもう、完全にもう一人の自分になってしまったのだろうか。僕もいずれは完全に竜之介ではなくリュウになるだろう。そうしたら彼みたいになるのだろうか。それは少し魅力的で、だけど怖かった。

リンは僕が守るから。

今の僕ではリンを守れない。この人の實力なら、僕達を助けられるかも知れない。

「いえ……助け合うのは当然の事ですから」

礼を言う僕達に、彼は爽やかな笑みを浮かべてそう言った。さっきまでの印象とは違う、優しい人だと思った。この人なら、リンを守ってくれるかもしれない。図々しいとは思いつ、勝手だとも思いつけど、僕は彼に頼んだ。パーティーを組んで下さいと。

断られると思っていた。だけど彼は了承してくれた。やはり先程

受けたような印象は間違っていたのかも知れない。

話をしていると、彼がとんでも無く強い人だと言うことが分かった。何か話せない事情があるようだけど、それでも良かった。

ギガントゴーレムを倒して宿に帰った後、暁さんに怒られた。

「兄は妹を守ったり助けたりするために産まれるから、“兄”って言うんだ。その兄が妹を傷つけてどうするんだ、リュウ。リンをしっかり守ってやれ」

全くその通りだと思った。僕が身を挺してでもリンを守るべきなのに、僕が守られていてはお話にならない。

暁さんにも妹がいると言うことが分かった。妹さんもこの世界に居るらしい。だけど、どこにいるか分からない。“妹”という単語を口にするとき、暁さんの目が濁る。上手く言えないけど、光が消えて真っ黒になったような。妹さんと何かあったんだろうか。でもそれを聞くことは躊躇われた。

「よければ、私のご飯を毎日食べて貰えませんか？」

リンがいきなりこんな事を言い出した。思わず啞然としてしまう。暁さんも同じ様子だった。だけどどうやらパーティーを組んで下さい、という意味だったらしい。ビックリしたよ。パーティーをもうしばらく組んで下さい、と僕から暁さんに言おうと思っていたことだから、リンに先を越されてしまった。

暁さんは迷っているようだった。僕はこの人が何を考えているのかイマイチ分からない。そりゃあエスパーでも無い限り人が何を考

えているかなんて分からないんだけど、この人は時によって表情がガラリと変わる。断られると思ったけど、彼は次のエリアを攻略するまでなら、と条件付きだけどOKしてくれた。

図々しいとは自分でも思う。まるで寄生虫だ、とも。だけど僕達がこの世界で生きていくには誰かの力を借りるしかないんだ。

暁さんなら、僕に何かあったときリンの面倒を見てくれるかも知れない。僕が死んだときに面倒を見てくれる人がいなきゃリンはきっと生きてはいけなйдらうから。何を考えているかは分からないけど、暁さんなら助けてくれるような気がする。

リンを守るためだ。強い人と関係を結んでおいた方が良い。

僕は鈴を守る。例えば僕自身の手では無理でも。

《Side Story》（後書き）

少し印象と違うかも知れませんが。結構大人びています。

《アンデッドカーニバル》。

エリア解放によって作られた街は、街と言うより村に近かった。家や店などは木で造られており、街の周りを森が囲んでいる。空はどんよりと濁って、太陽の光は見えない。街全体が薄暗く、NPC達の表情もどこか生気がない。不気味な街だ。それでもこのエリアは経験値稼ぎには良い場所らしく、プレイヤーが結構居た。

「まずは宿を確保するか」

そこまでの数のプレイヤーが居るとは思わないが、宿に泊まれる人数には限りがある。もしエリアから帰ってきて泊まる宿がない、なんて事になったら目も当てられない。すぐ側にあった宿に入り、カウンターにいるおじいさんに取り敢えず一日分の金を払っておいた。これで帰ってきたときに宿がない、なんて事にはならないだろう。

「何だか不気味な所ですね。NPCも死んだような顔してますし」
「気持ち悪い……」

攻略エリアに向かう途中、二人が街の様子を見ながら呟いた。

「《アンデッドカーニバル》っていうくらいだからな。モンスターもゾンビとか骨とかそういう系が出るらしいし」
「うわぁ……ゾンビとか嫌だな」

俺の言葉にリンが顔を青くする。まあ俺もゾンビとかと戦うのは嫌だけどさ。このエリアで一番多く出てくるのはゾンビらしい。攻

撃力や防御力はそこまで高くないが大量に出てくるらしい。貰える経験値はそこまで多くないが、モンスターが多いから狩りには丁度いいようだ。ゾンビ狩りで経験値を上げているプレイヤーも多いらしい。だけど油断していると映画よろしく取り囲まれて喰い殺されてしまうようなので注意しなければ。

街の奥にあるエリアの入り口に辿り着く。木で出来た門にはツタが巻き付いており不気味だ。門から奥は闇に包まれていて見ることが出来ない。

「行こうか」

「はい……」

ゴクリと喉を鳴らせた後、俺達は闇の中に足を踏み入れた。

「あれ？」

エリアに入っただけの俺達を待っていたのは先程までいた街だった。木造られた建物や濁った空などがそのままある。ただ一つ違うのは誰もいない事だ。プレイヤー達はおるか、NPCまで姿を消している。やはりここはエリアなのだろう。俺達は何も言わずに頷くと、そのまま進んでいくことにした。

歩いていて分かったが、この店や建物はさっきまでの街と同じ場所に同じように造られている。なのに誰もいない。それが余計に不気味さを出していた。

しばらく進んでいくとNPCが運営していた鍛冶屋のドアが開き、店主が出てきた。顔に気持ちはなく青ざめている。それを合図にしたかのように周りの建物から人が扉を開けて出てきた。その頭上にはHPバーが浮いており、アンデッドという名前が表示されている。

あれが掲示板で言っていたゾンビという奴か。面倒だからゾンビと呼ぶか。

武器を構え戦闘態勢をとる。リュウとリンはそれを見て慌てたように武器を構えた。

「来るぞ！」

鍛冶屋から出てきたゾンビが飛びかかってきた。口から涎を垂らし、白目を剥いている。近くで見るともの凄く気持ち悪い。リンなんか悲鳴を上げているぐらいだ。

俺は太刀を振るいゾンビの首を切り落とした。ズルズルと首が断面を滑り落ち、地面に落下して潰れる。かなりグロテスクな感じが映画のように血が飛び散ったりはしていない。全身が光の粒となつて消えていく。

「いやああああ！ こっちくんない！」

リンが悲鳴を上げながら向かってくるゾンビを滅茶苦茶に突きまくる。ゾンビの弱点は頭でそれ以外の部分を攻撃しても与えられるダメージはごく僅かだ。事前に二人にはそれを説明してあったのだが、リンの頭からはそれがすっかり抜けてしまっているようだ。さつきから胸や腹ばかりを突いていて、まるで倒せていない。リュウは後ろから襲ってくるゾンビに夢中でリンを構う余裕はなさそうだ。

「チィ、《ライト・スクエア》！」

前から押し寄せてくるゾンビ達を切り裂いて道を作る。四方八方から押し寄せてくるゾンビを真面目に相手してはとてもじゃないが先に進めない。

「リン、リュウ、走るぞ！ 俺の後ろに付いてこい！」

二人に声を掛けて前に走る。付いてきているかは分からないが、後ろから二人の返事が聞こえてきたから多分大丈夫だろう。前からやってくるゾンビ達の首を刎ね、倒れ込んでくる胴体を突き飛ばしながら前へ進む。このエリアのボスはエリアの最北部にある墓地にいと書かれていたから、このまま真っ直ぐ行けばたどり着けるだろう。前から襲ってくるゾンビはいなくなった。ゾンビは後ろから付いてきているだけだ。

走るのをやめて後ろを見てみるとリュウとリンが後ろから掴みかかってくるゾンビを吹き飛ばし、何とか付いてきていた。ゾンビに噛まれると毒状態になってしまふ。二人は何回か噛まれたのか毒状態になっており、HPを半分程まで削られていた。

「早く来い！」

ゾンビを振り払って追いついた二人を俺の後ろに匿まふ。二人はアイテムボックスから回復薬を取り出し、慌てて嚙下する。よし、これでHPは問題ないな。

ゾンビ達には悪いがスキルの試し打ちのための的になって貰うぜ。グルヴァジオを倒したときに手に入れたスキル、《間合い斬り》。《居合い切り》とどう違うんだろう。説明には間合いに入った相手を高速で切り裂く、と書かれていたけど。

《間合い斬り》。

スキルを発動した瞬間、青い光が俺を中心として円型に広がり始めた。円は2mほどまで広がると止まった。どうやら居合い切りのように腰に構える必要はなさそうだ。

円の中にゾンビ達が入り込んだ瞬間、体が勝手に動き出した。ゾ

ゾンビ達の所まで一瞬で移動し、太刀を横に振る。一連の動作はまさに高速と言って良い物だった。ゾンビ達は首を切り落とされ、崩れ落ちていく。

なるほど。《間合い斬り》はあの円の中に入り込んだ敵を高速で斬るスキルか。こういう敵が多いときには役立つスキルだな。

その後、《真空斬り》で近づいてくるゾンビを撃破しながら順調に進んでいく。順調と言っても至る所からゾンビが出てくるため進むものにも凄く時間が掛かったが。途中で何回かプレイヤーとすれ違ったが、エリアでは無干渉が基本なのでお互いに無視した。ようやく墓地が見えてきた辺りで、リンがいきなり何かに攻撃された。

「リン！」

リュウが襲いかかってきた何かを斧で吹き飛ばす。それは鴉だった。上を見上げると大量の鴉が飛んでいた。それは俺達に狙いを定めると、まるでロケットのように突っ込んでくる。モンスター名はロケットクロウ。まさにそのままだ。あまりにも数が多すぎて、不意を突かれた俺達は攻撃をモロに受ける。全身に刺される痛みが走った。クソッ、掲示板で鴉が出てくるということは分かっていたのに、ゾンビに気を取られてすっかり忘れていた。出鱈目に太刀を振り回すが鴉は一向に減らない。

「撤退するぞ！ ワープロープを使い！」

こいつらから受けるダメージは大したこと無いが二人は別だ。ギガントゴーレムの防具を装備していても、適正レベルを超えていてもこの鴉の攻撃をモロに喰らえばただではすまない。HPはジワジワと削られている。

「っはい」

二人は慌ててワイプロープを取り出して使用する。緑色の光に包まれ、俺達は街の中央に転送された。クソ、俺一人だったら簡単にクリア出来ただけで約束だからしょうがない。戦力的撤退だ。覚えとけよ、鴉共！

「なんだあれ」

街に帰るとプレイヤー達が何かを囲んで騒いでいた。というか女性プレイヤーが騒いでいる。キヤーキヤーと悲鳴を上げて中央に囲んでいる人に対して口々に何か言っている。

「なんでしよう、あれ」

リュウが尋ねてきた。俺が聞きたいぐらいだ。ああ、そう言えば掲示板に《アンデッドカーニバル》に二つ名持ちが来るみたいな事が書かれていたな。もしかしてあそこにいるのかも知れない。

「言ってみようぜ」

取り敢えずどんな奴がいるのか見に行くことにした。騒いでいる女性達の間割り込んで中を見てみる。中にいたのは黒髪なイケメンだった。やばいくらいのイケメン。顔全体がキリツとしていて凛々しい。装備している防具も武器である槍も結構上等そうだ。なんだよ。ゲームの中でもイケメンイケメンって女性（お前ら）それでいいのかよ！

「おや……ちよっとそこに君」

女性の間にいた俺に気付いたイケメンが爽やかな笑みを浮かべながら手招きしてきた。ん？

「君って掲示板で噂になつてた太刀使いクンだよな。君も僕の噂を聞きつけてこの街にやってきたのかな？」

違っわ。自意識過剰だなこのイケメンが！なんて面といえる訳もなく、俺は曖昧な笑みを浮かべるしかなかった。まあ仮面付けてるから見えないだろうけどな。しばらく向かい合っていると肩をポンポンと叩かれた。振り返ると顔を上気させ興奮した様子のリンが立っていた。

「ちょ、曉さんっ。その人、ウロボロス《不滅龍》に所属してる二つ名持ちの攻略組の人ですよ！」

リンは小声で耳打ちしたつもりだろうけどイケメンにはしつかり聞こえていたようで、イケメンはフツ、と気取った笑みを浮かべた。

「僕の事を知ってるんだね、お嬢さん。フフ、ありがとう」

リンはその言葉に顔を真っ赤にし、顔を押さえてフラフラしながらどこかへ行ってしまった。何なんだあいつは……。

「さて、所で太刀使いクン。僕と少し戦ってくれないかい？ 君がゴーレムマウンテンでモンスターを蹴散らしていたという話を聞いてね。無双する太刀使い、興味があつたんだ。ここで出会ったのも何かの縁、是非お手合わせねがいたい」

イケメンは気障な笑みを浮かべながらそう言ってきた。なんかこ

いつづいな。内心、僕が負けるわけ無いとか思ってたそう。よからう。最強の太刀使いであるこの俺が相手してやろう。

「ああ。いいぜ俺も二つ名持ちと戦いたかったところだ」

仮面のお陰で台詞がメツチャ決まった。声が低くなってるし今のかなり格好良かったと思う。

「それは良かった。僕の名前は虚空、よろしくね。二つ名は」

イケメン、もとい虚空は「二つ名は」の所で一瞬間を開け、

「ランスナイト《槍騎士》だ。よろしくね」

どや顔でそう言った。

このゲームには決闘というシステムがある。プレイヤーとプレイヤーが正々堂々と戦うための物だ。決闘をしている最中に他のプレイヤーが乱入していく事は出来ない。決闘にも種類があり、エリアと同じようにHPを削り合う通常モードや攻撃が当たれば勝ちという本数モードなどがある。普通、決闘では負けても死なない。だが、決闘で負けた相手は死ぬ、というデスマッチモードも設定を変えれば出てくる。今回の決闘では当然命は賭けない。

決闘の種類をどのようにするか虚空に尋ねると、奴は余裕ぶった顔で本数モードにしようといいだした。本数モードは攻撃を当てるだけでいいため、攻撃力はあまり関係ない。だからレベル差が合っても勝てる可能性は出てくる。と言うことは、俺はこいつに完全に舐められているという訳だな。面白い、ぶちのめしてやるぜ。

先に相手に三回攻撃を当てた方が勝者となる。決闘設定を終える頃には、俺達は大勢のプレイヤー達に囲まれていた。まるで見せ物だ。まあ二つ名持ちと噂の太刀使いが決闘すると言うのだから、注目されて当然だな。多分この戦いの事は掲示板に書き込まれるだろうから無様な姿は晒せない。イベントでドカンと目立ちたかったけど、まあいいや。今ここで俺の実力を見せてやろう！

頬のすぐ側を槍先が掠め、風が顔を撫でる。槍先が再び俺を捉えようと突き出されたため、《ステップ》で斜め後ろに跳んで回避する。やはり二つ名と言うのは伊達じゃないな。攻撃がかなり速い。槍先を回避して懷に入れば簡単に倒せると思っていたが甘かった。回避してもすぐに次の攻撃が来るせいでなかなか反撃に出ることが出来ない。《残響》を使えばいけるだろうけど、稀少スキルは使わ

ない事にしている。手の内はなるべく明かさない方がよいからな。

「成る程ね。確かに良い動きをするね。でも避けてばかりじゃ、勝てないよ！」《スタブ・スクエア》！」

虚空の槍が青く光り高速で突き出される。自分に向けられて分けるがやはりスキルというのは凄いな。現実ではあり得ない速度で槍が突き出される。スクエアという事は四連続だな。

《見切り改》によってどこに攻撃が来るか分かるが、体がついていけない。避けて三回だろう。体を思い切り捻って一撃目をかわす。だがすぐに二撃目が来る。太刀を地面に叩き付けてバランスを立て直し、思い切り右に飛んで二撃目をかわす。そして三撃目。後ろへ大きく跳んでかわす。虚空は一步前に踏みだし、最後の一撃を放ってくる。

——この時を待っていた！

向かってくる槍先に向かって、姿勢を低くしながら自ら大きく踏み出す。そして《受け流し》を発動し、太刀で槍先を受け止める。刃を横に傾け刃の上を滑らながら、虚空の懐に潜り込み隙だらけの脇腹に太刀を叩き込む。バリッ、と硝子が割れるような音が響き渡り虚空が後ろに吹っ飛ぶ。決闘の時は痛みを感じさせず衝撃だけを与える障壁^{バリア}を張ることが出来る。今のはそのバリアに俺の刃が当たった音だ。

「まずは一本。誰が勝てないだつて？」
「グッ……」

野次馬達からどよめきが起こる。
俺の言葉に虚空は余裕の笑みを消した。目つきが鋭くなり、唇が

ピクリと痙攣している。

虚空は無言で槍を握りしめると俺を睨み付け、いきなり槍で突いてきた。最初とは違い、速度がかなり上がっている。本気を出してきたということか。

連続で放たれる突きを刃で軽く逸らしスレスレの所でかわす。さっきのように体を捻って避けていたら体力がもたないからな。

「なかなかやるようだけどこれをかわせるかな？ 《スタブ・ペン タゴン》」

五連続の突きスキルか。さっきのように槍が青く光り、高速で突きが放たれる。だったらこちらでも連続スキルだ。《ライト・スクエア》を発動し、迎え撃つ。俺の太刀も虚空の槍のように青く光り、高速で動き出す。高速で放たれる突きを、高速の斬りで相殺する。問題は俺の方が一撃少ない、という所だ。

「ははっ！」

俺のスキルが終わったのを確認して虚空が嘲笑うかのように笑みを浮かべた。馬鹿め。体を後ろに大きく倒し、槍先が腹部を軽く掠るのを感じる。掠る程度では一本にカウントされない。太刀を地面に突き立てて体勢を立て直し、さっきと同じように懷に潜り込んで斬り付け——！？

横腹に激しい衝撃が走る。同時に硝子が割れる音が響き渡る。衝撃を受けた部分を見ると、槍の持つところがめり込んでいた。槍先以外でも攻撃できたのか！？

そのまま吹っ飛ばされ、地面をゴロゴロと転がる。クソ、一対一か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7059z/>

《Blade Online》

2012年1月7日01時04分発行